

ハンドボールにおける非利き腕プレーのキネステーズに関する現象学的研究
－個人戦術力を含意した起点構成化の促発指導を通じて－

スポーツ科学研究科 スポーツ科学専攻
学籍番号 221M20
氏 名 吉本 遼
指導教員 曾根 純也 教授

論文等内容の要旨

論文題目 ハンドボールにおける非利き腕プレーのキネステーズに関する現象学的研究
—個人戦術力を含意した起点構成化の促発指導を通じて—

学籍番号 220M20

氏 名 吉本 遼

指導教員 曽根 純也 教授

一般にゴール型球技の技術指導においてはゲーム状況の合目的な解決に向けて、利き側、非利き側に関わらず両側とも同じように動かすことが理想とされており、例えば、サッカー（日本サッカー協会、2020）やバスケットボール（日本バスケットボール協会、2002）においては、育成年代での非利き側の技術習得が推奨されている。しかし一方で、日本のハンドボール界では非利き腕の技術習熟に関する知見が少なく（日本ハンドボール協会、1992）、その指導方法が確立されていないという問題が挙げられる。

従って本研究では、研究Ⅰにおいて育成年代のハンドボール選手における非利き腕プレーに関する基礎的な知見の獲得を目的とし、国内トップ選手を対象に非利き腕のプレーに関する動きのコツやその習熟過程等についてインタビュー調査を実施した。研究Ⅱでは、育成年代のハンドボール選手における非利き腕プレーに関する習熟過程を明らかにすることを目的とし、研究Ⅰで得られた知見を基に育成年代の選手を対象に非利き腕プレーの促発指導を実施した。

その結果、研究Ⅰにおいて、ハンドボールにおける非利き腕プレーのコツ身体知とカン身体知に関する語りが得られ、非利き腕プレーの固有の知である「利き腕での攻撃戦術意図を対峙する防御者に先取りさせる知」が明らかとなった。研究Ⅱにおいて、育成年代のハンドボール選手における非利き腕プレーに関するキネステーズ（動く感じ）は形成位相（金子、2002）を経ていることが明らかとなり、その個人戦術力は非利き腕プレーの技術力は有しているが、その戦術的思考力は十分に有していない段階から始まり、最終的には、相手防御者の位置や視線を観察し、その意味構造を読み取った上で自身の攻撃行為を志向し、それに対応しようとする相手防御者の防御行為に対応できる段階になることが考察された。

英文タイトル Phenomenological study on kinesthesia of non-dominant arm play in handball

— Through the prompting instruction of starting point structuring,
which implies individual tactical skills —

英文氏名 YOSHIMOTO Haruka

Phenomenological study on kinesthesia of non-dominant arm play in handball
—Through the prompting instruction of starting point structuring,
which implies individual tactical skills—

YOSHIMOTO Haruka

[Abstract]

In general, it is ideal in goal-oriented ball game skill instruction that both dominant and non-dominant sides of the ball should be moved in the same way in order to achieve a goal-oriented solution to a game situation. For example, in soccer (Japan Football Association, 2020) and basketball (Japan Basketball Association, 2002), it is recommended to acquire skills on the non-dominant side during the developmental years. On the other hand, however, there is little knowledge of non-dominant arm skill acquisition in Japanese handball (Japan Handball Association, 1992), and there is a problem that the teaching method has not been established.

Therefore, in Study I, we aimed to obtain basic knowledge about non-dominant arm play among handball players in the developmental age, and conducted an interview survey of top handball players in Japan on the tips of movements and the process of learning to play with the non-dominant arm. In Study II, we aimed to clarify the learning process of non-dominant arm play among handball players in the developmental age, and based on the findings of Study I, we conducted a coaching session to promote non-dominant arm play among handball players in the developmental age.

As a result, in Study I, the narratives about the kinesthetic bodily knowledge and kan bodily knowledge of non-dominant arm play in handball were obtained, and the unique knowledge of non-dominant arm play, "the knowledge that makes the opposing defender anticipate the attacking tactical intention with the dominant arm" was revealed. In Study II, it became clear that the kinesthesia (feeling of movement) of non-dominant arm play in handball players in the developmental age went through a formative phase (Kaneko, 2002), and their individual tactical skills started at a stage where they had the technical skills of non-dominant arm play but did not have sufficient tactical thinking skills. Finally, it was considered that the player reaches the stage where he/she can observe the position and gaze of the opponent's defender, read the semantic structure of the defender's gaze, and then orient his/her own offensive action, and respond to the defensive action of the opponent's defender who tries to respond to the attack.

Keyword : Handball, Non-dominant arm, Kinesthesia, Individual tactical ability

目次

第 1 章	序章	1
第 1 節	研究の背景	1
第 1 項	Laterality現象の概観	1
第 2 節	問題の照準	2
第 1 項	ゴール型球技における非利き側の技術	2
第 2 項	個人戦術力としての非利き腕プレー	4
第 3 節	本研究の目的	6
第 4 節	本研究の構成	7
第 5 節	本研究の倫理審査	7
第 2 章	研究 I：非利き腕プレーに関する個人戦術力を抽出した調査研究	7
第 1 節	研究 I の目的	7
第 2 節	方法	8
第 1 項	個人戦術力を自然科学的手法で捉える問題点	8
第 2 項	個人戦術力を現象学的手法で捉える意義	9
第 3 項	対象者	11
第 4 項	インタビュー調査の方法と内容	12
第 5 項	語りの内容の作成	13
第 6 項	テキストの作成	14

第 7 項	テキストの分析	14
第 3 節	結果	15
第 1 項	A 氏の語り	15
第 2 項	B 氏の語り	18
第 4 節	考察	23
第 1 項	非利き腕プレーにおけるコツ身体知とカン身体知	23
第 2 項	非利き腕プレーにおける固有の知	25
第 3 項	非利き腕プレーにおける知習得の発生順序および動感素材の決定	27
第 4 項	非利き腕プレーにおけるなじみの地平	28
第 5 節	まとめ	30
第 3 章	研究Ⅱ：非利き腕プレーに関するキネステーゼの発生を提示した事例研究 ...	32
第 1 節	研究Ⅱの目的	32
第 2 節	方法	32
第 1 項	対象者	32
第 2 項	対象とする非利き腕プレー	33
第 3 項	スポーツ運動学における運動指導	34
第 4 項	現象学的反省分析	36
第 5 項	現象学的反省分析の方法と内容	38
第 3 節	結果	39

第 1 項	原志向位相における非利き腕プレーのなじみの地平	39
第 2 項	探索位相における固有の知への触発	40
第 3 項	偶発位相における固有の知の発生	43
第 4 項	形態化位相における固有の知への起点構成化	45
第 4 節	考察	48
第 1 項	非利き腕プレーに関するキネステーゼの発生様態	48
第 2 項	起点構成化の発生を促した促発指導	52
第 3 項	指導者の観察能力による創発阻害の危険性	58
第 4 項	非利き腕プレーに関する個人戦術力の変容過程	61
第 5 節	まとめ	64
第 4 章	終章	66
第 1 節	結論	66
第 1 項	非利き腕プレーの固有の知およびキネステーゼ	66
第 2 項	促発指導者の寄り添いと共感の重要性	67
第 3 項	非利き腕プレーの養成と課題	68
参考文献	71
図表	79

第 1 章 序章

第 1 節 研究の背景

第 1 項 Laterality 現象の概観

手や足、耳目などの末梢器官における左右差を意味するLateralityを、白井（1978, p.200）は「側性」と訳している。心理学的研究における側性について、Hinsieら（1970）は「書く、食べる、見る、聞くなどの行為において身体の一方の側を優先的に使うこと」と定義している。一方、生理学的研究における側性では、Touwen（1972）が脳機能の観点から半球優位性（cerebral dominance）という用語を用いており、「半球優位性とは特定の機能に関して、一方の大脳半球が主要な役割を果たす現象である」と述べている。つまり、半球優位性は、脳機能の非対称性を表している。例えば、言語活動に関して、右利きの者では左大脳半球が言語活動における優位半球あることが一般的な認識であり（品川ら、1986）、Touwen（1972, 747-755）は、「対器官（手、足、目、耳）を持つ有機体において、一方が他方よりも一定課題（認知的あるいは運動的な）の成績がまさっている現象」と述べている。

このように、側性を定義する際に、Hinsieは主観的要因を含む偏向性を取り上げ、Touwenは機能的優位性を取り上げている。つまり、生理学や心理学の分野での側性の定義の中には、偏向性と機能的優位性が混在しているのである。このようにLateralityに関

する研究は、生理学や心理学の分野で散見されている（伊田，1986；亀口，1975；松田ら，2011；品川ら，1986）。

また、国外のスポーツ科学分野での側性に関する研究について、エリート女子ハンドボール選手と一般成人女性を対象にトレーニングによる脳機能の変化を比較している研究（J.Hänggi et al., 2015）や利き手と非利き手の投球練習が投球技能の習熟に及ぼす影響を調査した研究（T.Stöckel & M.Weigelt, 2012）が見られる。一方で、国内のスポーツ科学分野では側性に関する研究について、調査研究や利き足についての研究（浅見ら，1981；浅見，1982；井上・佐藤，2003；菊地ら，1965）が見られるものの、利き手に関する研究は少なく、とりわけ利き手と非利き手の運動発達に関連した研究はごくわずかである（内山ら，1996）。

第2節 問題の照準

第1項 ゴール型球技における非利き側の技術

ゴール型球技では、ゲームの勝利に向けて、ゲーム状況の様々な場面で合目的的な解決が求められ、そのためには、できるだけ多くの、できるだけ高いレベルでの技術の習熟が必要である（會田，1992）。スポーツ運動学における技術は、「一定の運動解決のために発達してきた合理的運動形態」（金子，1985，pp.20-22），「特定の課題解決に現在のところ最も合目的だと判断された、ある具体的な運動の仕方」（金子，1990，p.25

7) と定義されている。

一般に、ゴール型球技の技術指導においては、利き側、非利き側に関わらず両側とも同じように動かすことが理想とされており、例えば、サッカーにおいては、脳の可塑性や神経系の発達等を考慮したゴールデンエイジ（小野，1998，p.19）の観点から、育成年代では利き足だけでなく、左右の足を同程度使えるよう育成していくことの重要性を挙げており（日本サッカー協会，2020，p.54）、同様にバスケットボールでも、ドリブル、パス等のボールコントロールが左右両方の手でできるように推奨されている（日本バスケットボール協会，2002，pp.66-86）。つまり、左右両側とも同じように動かすことのできる技術を身につけることによって、ゴール型球技におけるゲーム状況をより合目的、経済的、合理的に解決できる可能性があると考えられる。しかし一方で、ハンドボールの指導教本（日本ハンドボール協会，1992）では、非利き腕の技術指導に関する記述は無く、実際の指導現場においても非利き腕でのパスやドリブル、シュートの技術を向上させるための練習に時間が割かれることも少ないという現状である。

この事実は、非利き腕での技術がゲーム状況の合目的な解決に対して有効であると認識されておらず、その技術習熟のための指導方法が確立されていないことに起因していると考えられる。つまり、上述した両腕での技術を習得する理想に対しハンドボール界では立ち遅れの様相を呈してしまっているという問題が挙げられる。

第2項 個人戦術力としての非利き腕プレー¹

會田（2006, p.179）は、「個人戦術力を行為の中に示される知的な働きとその能力、すなわち実践知²と理解し、ゲーム状況を合目的的に解決するために個々の選手が行う具体的・実践的な行為」と捉え、また「個人戦術力は、『ゲーム状況の分析』『プレーの選択』といった戦術的思考力（知覚・認知的要素）と『動作の遂行』といった技術力（技術的要素）に規定される」と述べている。例えば、ハンドボールにおける攻撃側からみた1対1の攻防局面において、戦術的思考力は「自分（攻撃者）と相手（防御者）の位置関係の把握」や「その位置関係から自分（攻撃者）にとって有利なフェイントの選択」等を意味し、もう一方の技術力は「そのフェイントの実行」を意味している。

また、ゴール型球技の攻撃戦術における共通の課題は、「防御ラインを破る」「人数的優位をつくる」「空間的優位をつくる」（ケルン, 1998, pp.39-40）であり、攻撃者はこれらの課題を解決するために、防御者に自己のプレーを予測されないよう、プレー状況を効果的に解決するための選択肢をいくつも持っていることが求められる（會田, 1992）。したがって、本研究で着目している非利き腕プレーは、攻撃者のプレーの選択肢を増やすことにつながり、球技におけるゲーム状況を合目的、経済的、合理的に解決する

¹非利き腕プレー：「ハンドボールにおける1対1の攻防局面において攻撃者が用いる非利き腕側のパス、ドリブル、シュート、これらを実施する上で伴う身体運動」。

²実践知：「実践の場で求められていることが熟慮された、行為とともにある知」（會田, 2012a, 22）。

上で有効な個人戦術的行為であると考えられる。

しかし一方で、個人戦術力として非利き腕プレーを取り扱う際、ただ単に非利き腕でのパスやドリブル、シュート等ができればよいということではない。個人戦術力の技術的要素の部分だけを抜き出し、動作が遂行できるようになるだけではなく、そこに知覚・認知的要素である戦術的思考力が働いているかをみる必要がある。金子（2005a, p.327）は、このことについて、「神業のようなボールさばきのできる選手が、状況の意味を読めず、カン³を働かせることができなかったら、そのコツ⁴としての身体知⁵はまったくの宝の持ち腐れ」と指摘している。また、會田（2012b, 22）が述べているように個人戦術力は、身体化された戦術的思考力としてのカン身体知³と身体化された技術力としてのコツ身体知⁴の統一的な行為であるため、実際の運動ではこの二つを切り離すことはできず、互いに絡み合って運動を発生させていることになる。つまり、実際の競技場面で非利き腕プレーを有効に機能させるためには非利き腕での動作の遂行に加えて、そこに戦術的思考力を働かせる必要がある。したがって、非利き腕プレーを用いてゲーム状況を合目的に解決するためには、攻撃者は非利き腕プレーにおける戦術的思考力と技術力の両方を

³カン身体知・カン：「身体化された戦術的思考力」（會田，2012b，22）であり、「私の身体とそれを取り巻く動感志向の状況との関わりの中かで、動きかたを選び、決断して実行に移せる身体知」（金子，2005b，p.25）。

⁴コツ身体知・コツ：「身体化された技術力」（會田，2012b，22）であり、「私の身体それ自体に居合わせている身体知」（金子，2005b，p.25）。

⁵動感身体知・身体知：「私が動くときのコツをつかみ、カンを働かせることができるという働き全体」（金子，2005a，p.2）であり、「身体活動を通して何かを成し遂げようとした場合に、非言語的に、暗黙的に獲得される知的達成力」（會田，2012a，22）。

持ち合わせなければならないということである。このように、ハンドボールにおける非利き腕プレーを有効な個人戦術力として扱う際、そこに戦術的思考力と技術力が発揮されていなければいけないが先行研究においてこの点は未だ明らかにされていない。

第3節 本研究の目的

以上述べてきたようにハンドボールにおける非利き腕プレーに関して、日本のハンドボールの指導現場では非利き腕プレーがゲーム状況の合目的的な解決に対して有効であると認識されておらず、その技術習熟のための指導方法が確立されていないこととゲーム状況を合目的的に解決するために非利き腕プレーを用いる際、攻撃者は戦術的思考力と技術力の2つの要素を働かせる必要があることを指摘した。

したがって本研究では、ハンドボールにおける非利き腕プレーを対象として、その個人戦術力に関する基礎的な知見の獲得とその変容過程を明らかにすることを目的とする。

なお、本研究では浅見（1982，129）が述べている「一般に片側で行なうことができ、しかも熟練を必要とする動作を行なうとき、選択的に能率よく使用できる側を利き側とよんでいる」をもとに研究をすすめることとする。

第 4 節 本研究の構成

本研究では、研究Ⅰにおいて育成年代のハンドボール選手における非利き腕プレーの個人戦術力に関する基礎的な知見の獲得を目的とし、国内トップ選手を対象として非利き腕のプレーに関する動きのコツやその習熟過程等についてインタビュー調査を実施した。

研究Ⅱでは、育成年代のハンドボール選手における非利き腕プレーに関する個人戦術力の変容過程を明らかにすることを目的とし、研究Ⅰで得られた知見を基に育成年代の選手を対象として非利き腕プレーの促発指導を実施した。

第 5 節 本研究の倫理審査

本研究は、大阪体育大学研究倫理審査部会の審査を受け、承認されている（承認番号21-36）。

第 2 章 研究Ⅰ：非利き腕プレーに関する個人戦術力を抽出した調査研究

第 1 節 研究Ⅰの目的

研究Ⅰでは、国内で活躍している2名のハンドボール選手を対象に、ハンドボールにおける非利き腕プレーに関する動きのコツやその習熟過程についてインタビュー調査を実施し、育成年代のハンドボール選手における非利き腕プレーの個人戦術力に関する基礎的な知見の獲得を目的とした。

第 2 節 方法

第 1 項 個人戦術力を自然科学的手法で捉える問題点

球技の個人戦術力に関する先行研究では、主に個人戦術力を戦術的思考力と技術力のどちらか一方の側面から検討し、現象を数値に置き換える自然科学的手法で行われてきた（道上・阿江，1998；中川，1991；鬼澤ら，2004；和田ら，2003）。自然科学的手法は、構築された理論や抽象化した概念をさまざまな特定の状況に適用することを強みとする（パトリシア・ベナー，2004，p.158）。しかし一方で、複雑な要因が絡み合う中で発揮される行為を総体として理解したり、行為の意味や意図を理解したりすることはできないと指摘されている（會田，2012a，20）。

松元ら（2015）は、ゴール型球技における戦術的知識とパフォーマンスの関係性を明らかにすることを目的とし、自然科学的手法を用いて、戦術的知識の測定とパフォーマンスの測定を行っている。戦術的知識の測定では、ゴール型球技の専門家3名によって戦術的知識を測定するための問題が作成され、その正答率によって戦術的知識を評価している。パフォーマンスの測定では、戦術的課題が設定された攻撃者と防御者の1対1の攻防における攻撃者の攻撃成功率によってパフォーマンスを評価している。また、パフォーマンスの測定では防御者の能力によって差が出ないように防御者は常に同一の選手が行い、トラップ技能（ボールを止める技術）による差をなくすためにハンドパスで行うことを設定している。その結果、戦術的知識の獲得がフィールド上でのパフォーマンスを規定する

要因の一つとして推察された。しかし一方で、戦術的知識の測定においては被験者（回答者）のプレイヤーとしての技術力が考慮されていないため、実際のプレーにおける戦術的知識を評価しているとは言い難い。また、パフォーマンスの測定においてはトラップの技術力の差をなくすためにハンドパスを行っているが、これによって攻撃者が攻撃を成功させたことは、ハンドパスの技術力によって導かれた戦術的知識を用いて攻撃を成功させたのであって、本来のトラップの技術力から導かれる戦術的知識を用いた攻撃の成功とは質的に大きく異なると考えられる。つまり、個人戦術力を要素に分け自然科学的手法で測定することによって、個人戦術力そのものを検討することはできないことを指摘している。したがって、非利き腕プレーのような個人戦術力の検討には自然科学的手法以外の研究方法が適用されなければならない。

第2項 個人戦術力を現象学的手法で捉える意義

前述している個人戦術力に関わる領域の問題の中には、自然科学的手法による数量化では解明することができない領域が存在する。個人戦術力の問題圏には数量化では扱うことのできない個々の主観が含まれるため、個々の主観的視点が重要視される。個人戦術力を検討するために、會田（2012a, 21）は、「個人戦術を客観化して対象としてとらえるのではなく、『体験者の内的視点』（西條, 2007, p.10）や『渦中の視点』（浜田, 2007）から、行為者の世界の内部に入り、行為者の立場から世界を眺める必要がある（Nichol

lls et al., 2005)」と述べている。このような態度は、現象学的態度と呼ばれ、医療や看護の現場でも重視されている。看護師と患者の体験世界に焦点を当てた研究を行った広瀬（1992）は、「人間の行動にはすべて、その人個々の意味がある。つまり、ある状況をどう意味づけて行動するかは人によって異なる。その意味を解釈したい」と考え、「集団を数量化したものでは、個々の質的・内面的な特性が失われてしまうことがわかった。生きた人間は、その生きた体験と共にマスでは扱いきれない部分がある」と指摘し、「因果関係を明らかにしようとするものではなく、むしろ生きられた体験としての現象の本質を明らかにしていくことを探究する記述的研究方法である」現象学的手法を自身の研究に用いた。

金子（2005b, pp.25-26）は、身体知の分析手法について、「カンやコツといった本原的な固有領域に属する生命的な身体知を因果決定論に基づく精密科学によって分析しようとすることは不可能」と指摘し、「カンの運動分析をするには、コツのときと同様に、現象学的還元⁶を施してから分析に入ることになります」と述べている。つまり、人間が行う運動における個人戦術力の領域では、自然科学的手法による数量化では解明することができない問題が存在し、それを解明するために現象学的手法が用いられているのである。したがって、本研究で着目しているハンドボールにおける非利き腕プレーに関する個人戦術力についても、その現象を行為者の視点からありのままに捉え、現象の本質を探

⁶現象学的還元：「自然的態度から、超越論的態度への態度変更」（岩内，2016，56）。

ることが非利き腕プレーの個人戦術力を捉える上で最も適した手法であると考えられる。

第3項 対象者

対象者は、国内トップリーグである日本ハンドボールリーグでのプレー経験があるハンドボール選手男女2名である。この2名は、いずれも本研究者が本研究の目的を達成するためにふさわしいと判断し、協力を依頼したものである。それぞれの競技プロフィールは以下の通りである。

対象者1：A氏

性別：男性

利き腕：左

非利き腕：右

ポジション：ライトバックプレーヤー（図1）

主な戦績：2016年ジュニアアジア選手権ベスト4

対象者2：B氏

性別：女性

利き腕：右

非利き腕：左

ポジション：センターバックプレーヤー、ライトバックプレーヤー（図1）

主な戦績：2014年ジュニア世界選手権出場

いずれの対象者にも、本研究の趣旨や調査内容について事前に電話および文書（資料1）にて十分に説明し、調査への協力を依頼し、承諾を得た。インタビュー調査に先立ち、いずれの質問項目に対しても回答を拒否できることを伝え、調査内容の音声および映像記録、研究成果の公開に関して了解を得た。また、調査の趣旨説明からインタビュー実施までの間に、ラポール(川野, 2007, p.61)の形成に努めた。

第4項 インタビュー調査の方法と内容

インタビューは、本研究者が調査者となり半構造化面接（會田, 2008, 64-65）の方法を用いて実施した。インタビュー調査の内容は、得意としている非利き腕プレーのコツ、コツを獲得するまでの過程、コツ獲得後の変化、コツの伝達等であった。非利き腕プレーのコツの同定を容易にするために、インタビュー調査のおよそ2週間前にオンラインビデオ会議サービスZoom（以下「Zoom」とする）を用いて調査内容を伝え、自身の非利き腕プレーについて振り返りをさせた（資料2）。インタビューはZoomを用いて実施し、場所は本研究者の研究室と対象者の自宅であり、第3者の出入りがない静かな場所であった。すべての発言内容と身体を用いたデモンストレーションについては、Zoomの録画機能を用いて録音、録画した。インタビュー調査の内容と標準的な流れについては、本研究者とゴール型球技を専門とする1名の研究者との間で検討して決定した。本研究者は事前に面接状況を想定した練習を行い、インタビュー調査の習熟をはかった。イン

インタビューでは、調査者自身が、対象者の語りに対して敬意と好奇心をもって臨むこと、対象者の語りの意味の明確化や拡張を試みることによって、語りを共同的に生成していくことを心がけた（無藤ら、2004、pp.2-7）。共同生成される語りについて、會田（2012b、38）は「個人の経験を対象とした研究においては、対象者が自らの経験を語り、調査者はそれを記述するという方法よりは、両者の対話を介することではるかに深く広範な体験が得られる」と述べており、本研究では、インタビューを通して調査者と対象者が共同的に語りを生成していくこととした。

第5項 語りの内容の作成

まず、対象者ごとに、インタビュー調査の録音記録からすべての発言内容を逐語録として文章に起こした。次に、語りの意味内容全体を十分理解できるまで逐語録を熟読し、語りの意味内容を崩さないように、得意としている非利き腕プレーのコツ、コツを獲得するまでの過程、コツ獲得後の変化、コツの伝達等の項目にまとめた。データの妥当性と信頼性を保証するために「コミュニケーションによる妥当化（communicative validation）」（ウヴェ・フリック、2011）を行った。すなわち、調査内容のまとめについてそれぞれの対象者に送付し、対象者の発言の意味や内容と本研究者の解釈が適合しているか、加筆および訂正箇所はないかを確認した。そして、これらの作業を終えたものを基礎資料とした。

第 6 項 テクストの作成

得られた基礎資料を精読し、対象者それぞれの語りの内容から、非利き腕プレーに関する実践知の記述を抽出し、対象者ごとにテキストを作成した。テキストを作成後、その妥当性と信頼性を高めるために、「研究者によるトライアングレーション」（ウヴェ・フリック、2011）を行った。すなわち、対象者の語りの意味内容が恣意的に変換されていないかを確認するために、2名の研究者に協力を求めた。この2名は、スポーツ運動学を専門とし競技場面における指導者として活躍した経験のある研究者1名と、ハンドボールのコーチング研究に従事し高い指導力を有する指導者1名であった。

第 7 項 テクストの分析

曾田（2008、65）は、ハンドボールのシュート局面における個人戦術に関するテキストを分析するにあたって、「既存の理論をできるだけ保留し、現象学的態度で臨んだ」と述べている。現象学的態度について、広瀬（1992、48-55）は、「対象者のパースペクティブ（視点）から対象者の体験の意味を忠実に理解すること」、「研究の対象になっている個々のテーマにどれだけありのままに近づいていくかということ」と述べている。したがって本研究においても、対象者の語りの内容に対して理論的前提を持たず、対象者が自らの経験の中で形成していった知をありのまま捉えようとする態度を持ってテキストの分析に臨んだ。

第3節 結果

以下に、非利き腕プレーの個人戦術に関するテキストを対象者ごとに示す。なお、テキスト中の（ ）は、調査者の補足を示す。

第1項 A氏の語り

a. 得意としている非利き腕プレー

1対1の攻防局面において、防御者を攻撃側から見て右側に躲けて打つ非利き腕（右腕）でのカットインシュート（写真1）

b. 得意としている非利き腕プレーについて

左手（利き腕）を（防御者に）守らせるみたいなイメージですかね。相手（防御者）が来ないと（ボールを）持ち替えても意味がないんで。（1対1の）スピード（は）出さなくてもいいから、ちゃんと左側（利き腕側）を（防御者に）守らせて、その（守ろうとした）タイミングで逆をつくってというイメージですかね。（防御者に）接触まではさせないほうがいいと思います。逆に接触しにくるとかのタイミングですかね。（1対1に）入る位置とかも（大切）ですかね。（防御者の）正面か、ちょっと非利き手側（右側）寄りにディフェンス（防御者）に対して入って、利き手側（左側）をディフェンス（防御者）が（位置）取りやすくしてあげるってことです。

（他にも）非利き手側（右側）の肩をちゃんと入れて、左（利き腕）の方（シュート）を（防御者に）意識させた方がいいのかなっていうのはある。そこから相手（防御者）が

食いついてきたら逆（非利き腕側）行った時に反応できないんで、しっかり左（腕でのシュート）を意識させるためにしっかりシュートモーションとったり、フェイントでこっち（右肩）入れといたほうがいい気がします。

c. 非利き腕プレーの習得過程

（高校1年生の時に利き手を）大怪我して、しばらく左手（利き手を）使えなくて、で、遊び程度に（非利き腕で）ボール（を）投げてて、怪我して何も練習してない期間に、そこらへんからちょっと自分で両利き（に）なろうと思って、特に指導されたわけじゃないですけど、監督も右手（非利き腕）もっと使えよみたいな感じだったんで、監督も「使え」って言ったんで、「全然いいよ」って。

（監督の「もっと使えよ」って言葉について）それは間違いないですね。絶対、それがないとむしろこんな使ってなかったのかなってのはあります。

自主練（の）最後（に）遊んでいるときに、なんか左手（利き腕）でシュート打つふりして、右（非利き腕）で持ち替えたらいいんじゃないかなって思って、パってやってみたらそれがめっちゃめっちゃハマって、それをだんだん自分の今の感じに持ってたって感じですね。

d. 競技場面での実際

よく使うのは、ポスト（を）1・2の間（レフトサイドディフェンスとレフトハーフディフェンスの間）に片方を置いて、その逆側のバックプレイヤー（レフトバックプレイヤー

ー) がめっちゃ広げて、で、真ん中2枚(レフトセンターディフェンスとライトセンターディフェンス)が孤立した状態になるじゃないですか。そこを2人(自身とセンターバックプレイヤー)で思いっきり1対1するみたいなフォーメーションとか。そういう時に思いっきり1回(ディスタンスシュートを)打ったり、思いっきり1対1いったら、もうディフェンス(防御者は)怖くなってくるんで、それ(を)1回見せた状況で、次すぐパッて使うって感じですね。

e. 非利き腕が使える前と後の変化

結構頭で色々(プレーを)考えて、「こうゆうのできそう」とか「こうゆうの面白いんじゃない」って考えて、いきなりパッてやるタイプだったんで、両方(の腕を)使えることによって、そのバリエーションとかもめっちゃめっちゃ増える。逆にダメだった時の「逃げ」にも使えるっていうところらへんですかね。まあ、カットインだったりなんなりで、利き手側じゃ投げれないだったり、ちょっと(防御者がパス)カット(に)入られているとかが見えたりした場合とか。右(非利き腕)で持っても、普通の人だったら飛ばし(パス)だったりとか投げれなかったりとかするところをそこを投げれたりすることでギリギリ(パスカットを)回避できたりっていうのがあったりします。

f. 非利き腕でのシュートについて

(非利き腕のカットインシュートを打つ時、身体が非利き腕側に)流れてるから単純に引っ張り側(攻撃側から見て左側)打とうってなったら意外とキーパーって止めるとかも

あって、自分の入ってる深さとか距離とかでシュート（が）入る位置が全然違って、そこまで考える余裕がたぶん最初はないんで、そこが最初の方は難しくなってくると思います。（非利き腕で自分が打ちたいコースは）投げミスとかがない限りは、ある程度は狙えますね。（非利き腕の苦手なシュートコースは）引っ張り上（ゴールの左上）ですね。単純にやってきた手じゃないんで、そこ（左上）に打てはすると思うんですけど、多分シュートフォームとかで（ゴールキーパーにシュートコースが）バレやすいと思うんですよね。引っ張り（ゴールの左下）だったら、しっかり肩を入れて、下だったら引っ張れるんですけど、（左）上はなかなか難しいかなあと。ちょっと横振りとかだったら投げれるんですけど。結構（防御者に）接触されて、横から押されてるなっていう状況だったら、あんま逆らわずにそのままちょっと流れて引っ張り（左側）打ったり、結構綺麗に抜けちゃう時とかもあるんで、その時は早めに流し（右側）狙ったりっていう感じですかね。

第2項 B氏の語り

a. 得意としている非利き腕プレー

1対1の攻防局面において、防御者を攻撃側から見て左側に躲してから打つ非利き腕（左腕）でのカットインシュート（写真2）

b. 得意としている非利き腕プレーについて

基本的にフェイントっていうよりストップフェイントみたいな感じでよく使う。ディフ

エンス（防御者）が見てないっていうか、（防御者が）センタープレーヤー（隣のポジションの味方）を意識している時に、アウト（利き腕側）のズレた位置（を）とっというて、ディフェンス（防御者が）来るのを待って、ストップして（非利き腕側に切り返す）。キュッキュンみたいな感じですね。

（他に）よくやるのは、右（腕）のステップ（シュートやランニングシュート）を（防御者が来る前に）まず見せて（打って）、（防御者を）より寄せて、イン（非利き腕側）にいきやすくするっていうのがポイントかな。（利き腕の）ランニング（シュートやステップシュートを）ディフェンス（防御者が）来る前に1発打っというて、2本目はそれを使ってイン（非利き腕側）にいく感じです。

（非利き腕を使えるようになる前は）左手（非利き腕）を使えないから（ライトバックで）アウト・イン（切り返し）しても、結局守られる。肩も入れづらいし、あまりズレないっていうところがあったんですけど。（非利き腕プレーを）習得してから、スピードの出方とか肩の入れ方とかも変わってくるから、よりシュートにはいきやすくなったかなっていう感じはしますね。

（切り返して右腕でカットインシュートをしようとしたら）ズレた位置で右（足）でもらってストップ、左（足）で、こういう感じ（右腕でシュートする動作を実演）。抜けきれてない状態みたいな感じ。左（腕を）使えるようになったら、右（足）でストップして、後ろで左（足）踏んで、もう1回右（足）で肩を入られるっていうところで、しっか

り抜けるっていう部分と抜けなくても最悪パスまでできるんで、楽にズラせるっていう部分。

c. 非利き腕プレーの習得過程

（非利き腕を）使い出したのは中2，中3ぐらいですね。右手（利き手）を2，3週間ぐらい怪我してて、ボール（を）左（手）で投げてたら、できるようになった感じ。で、徐々にパスとかシュートとか使ってた感じですね。で、大学でシュートまで（打てるようにした）みたいな。やっぱ、右45（ライトバック）やることが多いから「左もあった方がいいよな」みたいな感じで、もう高校ぐらいから本格的に使うようにはなってきたんで、本当は右利きです。やっぱ、練習終わった後に（自主練習で）ちょっとやるみたいな感じが多かったですね。

d. 競技場面での実際

センタープレーヤー（隣のポジションの味方）がボール（を）持っている時、2枚目（防御者）がクロスアタックで集中して寄ってる時に、自分がズレた位置取って、センター（隣のポジションの味方）からのパスに合わせてっていう感じですかね。2枚目（防御者）が高めに出てくる時っていうのは使いづらい。使いづらくはあるんですけども、まあいつかチャンスはあるんで、そのチャンス逃さないようにずっと前（の状況を）見る。前（の状況を）見て、準備っていうことは意識してます。（防御者が高めに出てくる時に使いづらい理由は）ずっと見られてるっていうのと、位置取り的に、センター（隣のポジシ

ヨンの味方) の人も結構パス (を) 出しづらくなってっていうところですかね。

e. ボールの持ち替えについて

(利き手から非利き手にボールを) 持ち替えますね。ストップの時に右 (手) で、1 歩左 (足を) 後ろ (に) 下げる時に (左手に) 持ち替えてます。そこは無意識 (で持ち替えています)。アウト (カットインシュート) であれば、そのまま右手で打つんで、ストップの時点では右手でっていう感じですかね。

f. 両利きのプレイヤーのディフェンスをする時

(チームメイトだった両利きプレイヤーを) どっちに抜かしたほうがいいのかっていうのは難しい部分ではあるから、有利ではあるなっていう感じですね。どっち (に抜かせて) も結局 (シュートを打たれて) 怖いから勝負できないっていう。

g. 非利き腕でのシュートについて

自分的に流し (ゴールの左側) が結構苦手で、結構引っかけ (ゴールの右側) を打ってしまうんですけど、基本的にはキーパー (は) 引っかけ (ゴールの右側) で待ってるから、けっこうシュート外すんですけど。なんか、流し (ゴールの左側) が苦手ではありますね。(利き手である右手の) 流し (ゴールの右側) は苦手じゃないですけど、左手でやると、なんかコントロールが効かないですね。流しだと。

(非利き腕で打ちやすいのは) 引っ張りですね。基本的には引っ張り下 (ゴールの右下) とかが多いと思います。(カットインシュートの時) キーパー (を) しっかり見るよ

うにはしてるんですけど、溜めて（空中で）キーパー（を）見て、なるべく引っ掛けたいから流し（を）頑張って（打つように）見せるようにして、最後に引っかけて感じにはしてるんですけど。（非利き腕で）アウト・イン（切り返し）した時に、ちょっと身体（を）流し（ゴールの左側）に倒すぐらいのイメージではやってますね。

h. 非利き腕が使える前と後の変化

（非利き腕が使えるようになって）プレーの幅が広がって楽しくはなったし、逆（側の）サイドの方の飛ばし（パス）とかまでできるようになったってところで、（非利き腕での飛ばし）パスの精度を上げようかなという意欲は出たと思います。

I. 習得にむけた練習について

んー、やっぱりここで重要なのが、（防御者に対して）半身ズレた位置を取っとくっていう部分だから、練習メニューでいう、2枚目（防御者）が遅れた状態で入ってくる練習。2対2で、タッチして2枚目が遅れてみたいな感じで、（切り返しの判断の）感覚（を）掴んでいくのが一番いい、自分もやった中で一番それがいい練習メニューかなとは思うんで。それを繰り返しやっていくのがいいかなという感じですかね。

第4節 考察

第1項 非利き腕プレーにおけるコツ身体知とカン身体知

金子（2005a, p.2）は、動感⁷身体知を「私が動くときのコツをつかみ、カンを働かせることができるという働き全体」と表現し、會田（2012b, 22）は「身体活動を通して何かを成し遂げようとした場合に、非言語的に、暗黙的に獲得される知的達成力」と表現している。これに関連してA氏は「（1対1の）スピード（は）出さなくてもいいから」、「しっかり左（腕でのシュート）を意識させるためにしっかりシュートモーションとったり」、「フェイントでこっち（右肩）を入れといたほうがいい気がします」と語っている。また、B氏は「フェイントっていうよりストップフェイントみたいな感じ」、「（利き手から非利き手にボールを）持ち替えますね。ストップの時に右（手）で、1歩左（足を）後ろ（に）下げる時に（左手に）持ち替えてます」と語っている。これらの語りは、自身の身体の動かし方について示されており、これらには非利き腕プレーを成立させるために必要不可欠な動感が含まれていると考えられる。この語りは個々人の身体感覚に関する動感意識の語りであり、行為者の視点から語られたものである。

コツについて、金子（2002, p.220）は「自らの身体を動かして、何らかの行為をうまくやり遂げられるときに、その『動きかた』の要となること」と述べ、続けて「コツ

⁷動感・運動感覚・キネステーゼ：「運動と感覚の不可分の統一体」（金子，2005a, p.25）であり、「端的に言えば『動きの感じ』あるいは『動く感じ』（佐藤，2009, 57）。

をつかんだ」という表現を、M.メルロー＝ポンティを引用しながら「動きかたの要領とか、つばとか呼吸を私の身体がわかったときに発生する。（中略）『身体化』が成立したときである」と説明している。つまり、両者の語りは、自身の非利き腕プレーのコツについての語りであり、知の身体化が成立している内容が語られていると考えられる。したがって、A氏の「スピードの調整をする」、「利き腕のシュートモーションをつくる」、「非利き側の肩を入れる」といった動感やB氏の「フェイント（切り返す）よりストップする（止まる）」といった動感は、非利き腕プレーにおける自己身体の動感身体知として捉えられ、両者の非利き腕プレーのコツ身体知と理解することができる。しかしながら、ここで示されるコツ身体知は非利き腕だけでなく、利き腕での動作でも共通する内容であることを指摘しておかなければならない。

一方で、金子（2005b, p.25）は「私の身体とそれを取り巻く動感志向⁸の状況との関わりのなかで、動きかたを選び、決断して実行に移せる身体知」をカン身体知と呼び、また「状況」という言葉を、ボイテンデイクを引用しながら「世界に構造化されている部分の意味内容との関わりのなかで初めて現れてくる」その関係自体とし、コツ身体知とは区別して説明をしている。

A氏の「左側（利き腕側）を（防御者に）守らせて、その（守ろうとした）タイミング

⁸ 志向：「意識が一定の対象に向かうこと、考えや気持ちがある方向を目指すこと」（會田，2012b, 19）。

で逆をつくってというイメージ」,「(防御者の)正面か,ちょっと非利き手側(右側)寄りにディフェンス(防御者)に対して入って,利き手側(左側)をディフェンス(防御者)が(位置)取りやすくしてあげる」という語り,またB氏の「ディフェンス(防御者)が見てないっていうか,(防御者が)センタープレーヤー(隣のポジションの味方)を意識している時に,アウト(利き腕側)のズレた位置(を)とっというて,ディフェンス(防御者が)来るのを待って,ストップして(非利き腕側に切り返す)」という語りは,防御者を含んだ周囲の状況に対しての語りである.つまり両者は,防御者である相手の意図や自身との位置関係,防御者の意識について語っている.つまり,両者の語りは,ハンドボールの1対1の攻防局面における自身と状況との関わりを考慮した上での語りであり,有意義な状況判断についての内容が語られていると考えられる.したがって,A氏の「防御者が接触しようと動き出すタイミングを先読みする」,「防御者が利き腕側を守りやすい位置関係を把握する」といった動感やB氏の「防御者の意識(視線)を感じる」,「防御者が利き腕を守りに来るのを待つ」といた動感は,非利き腕プレー時における状況関係の動感身体知として捉えられ,両者の非利き腕プレーのカン身体知と理解することができる.

第2項 非利き腕プレーにおける固有の知

卓越した選手における個人戦術の実相について,會田(2008,70)は「卓越した選手がプレー状況を有利にするために行っているさまざまな動きは,それ自体に固有の意味

を持つのではなく、その動きの前に行った動き、あるいは引き続いて行った動きとの関連の中ではじめて意味を持つように構成され则认为られる」と指摘している。このことについて、A氏は「左手（利き腕）を（防御者に）守らせるみたいなイメージですかね。相手（防御者）が来ないと（ボールを）持ち替えても意味がないんで」、B氏は「（非利き腕を使えるようになる前は）左手（非利き腕）を使えないから（ライトバックで）アウト・イン（切り返し）しても、結局守られる。肩も入れづらいし、あまりズレないっていうところがあったんですけど。（非利き腕プレーを）習得してから、スピードの出方とか肩の入れ方とかも変わってくるから、よりシュートにはいきやすくなったかなっていう感じはしますね。」と語っている。

以上、會田の指摘や両氏の語りから、非利き腕プレーそれ自体がゲーム状況を合目的的に解決するために有効に機能しているとは考えづらく、むしろ非利き腕プレーは、非利き腕側にボールを持ち替える前の動きとの関係の中で有効に機能していると考えられる。したがって、「利き腕でのシュートの実施」、「利き腕を守らせる位置取り」、「防御者に利き腕でのシュートを意識させるフォーム」といった「知」があって初めて非利き腕プレーは機能していると解釈できる。

會田（2008, 68-69）は球技における個人戦術の最小単位を「ひとりの選手」ではなく、「対峙する選手間の関係」ととらえ直し、ハンドボールにおけるシューターとゴールキーパーの関係を例に出しながら「シューターはひとりでプレーを完結できる立場には

なく、シューターの戦術的意図をゴールキーパーに先読みしてもらい、対応してもらって、はじめてプレーが成立する」と指摘している。このことは、攻撃者と防御者の1対1の攻防局面でも同様に考えられる。つまり、両氏は自身の利き腕での攻撃戦術意図を対峙する防御者に先取りさせ、非利き腕プレーを成立させていると考えられる。つまり、非利き腕プレーの個人戦術における固有の知とは、単に非利き腕での動作が可能になるという程度の能力だけではなく、利き腕でのプレーを相手に防御させる、すなわち「先取りさせる知」が現出されるものと推察できる。したがって、本研究における非利き腕プレーに関する「利き腕での攻撃戦術意図を対峙する防御者に先取りさせる知」は、非利き腕プレー固有の知であり、個人戦術力の一つと考えられる。

第3項 非利き腕プレーにおける知習得の発生順序および動感素材⁹の決定

第1項でコツ身体知には、非利き腕プレーを成立させるために必要な動感が含まれていると述べたが、ここには非利き腕プレー習得に際しての順序性が隠されているものと捉えられる。コツ身体知は未来の動き方を予描できるカン身体知としての「予描先読み能力」（金子，2005b，pp.48-50）と絡み合いの構造をなしているため、B氏が語った「（防御者が）センタープレーヤー（隣のポジションの味方）を意識している時に、アウト（利き腕側）のズレた位置（を）とっというて、ディフェンス（防御者が）来るのを待って、ス

⁹動感素材：「動きの感じがわかる材料となる運動」（柴田，2015，15）。

トップして（非利き腕側に切り返す）」というカン身体知を具現化させるためには，すでに「非利き腕側の足を後ろに下げる時にボールを利き腕側から非利き腕側に持ち替える」というコツ身体知が習得されていることが前提となっていると考えられる．同様にA氏の「左手（利き腕）を（防御者に）守らせるみたいなイメージ」を具現化させるためには，スピードは出さずにシュートモーションをつくるというコツ身体知が前提となっていると考えられる．

また，予描先読み能力の前提として，学習者には「敵の動感意識に潜入し，あるいはめまぐるしく変化する状況のなかに潜む敵の動感形態の意味構造を一瞬にして読み解くこと」（金子，2005b，p.49）が求められる．つまり，非利き腕プレーを試合で具現化させるためには，単に非利き腕での動作を反復するだけのトレーニングでは不十分であり，指導者は学習者に対して，非利き腕での動作をできるようになるための動感素材を呈示することに加えて，対峙する相手防御者の動感意識を読み解くことを前提とした未来の動き方を予描できるカン身体知を絡めた動感素材を呈示することが必要であると考えられる．

第4項 非利き腕プレーにおけるなじみの地平

A氏とB氏はともに，利き腕の怪我が原因で非利き腕の技術習得への道が切り開けたようだ．さらにその習得過程の当初，A氏は「自主練（の）最後（に）遊んでいるときに」，B氏は「練習終わった後に（自主練習で）ちょっとやるみたいな感じが多かったで

すね」と語っている。このことについて、スポーツ運動学では運動ができない段階から自由自在にできる段階までの過程を、運動主体の動感の変化に着目しながら、原志向位相、探索位相、偶発位相、図式化位相、自在位相の五位相に分けて考えている（金子，2002，p.418-430）。

金子（2002，p.409）は、「動く感じとしての運動感覚能力を伝承する営みに入る前に、その不可欠な前提として、原伝承の受動地平¹⁰の存在を確認しておかなければならない」と指摘し、「原志向位相における動感形態の発生を育むのは〈なじみの地平〉である」（2005b，p.159）と述べている。「なじみの地平」について、金子（2005a，p.359）は、「私が動くという場面のなかで、私の身体がその雰囲気になじんでいて、その場をあらかじめ避けようとしたり、その場から逃げ出したりする気が生じない気安さ」と説明している。つまり、両者にとって自主練習の場は、非利き腕プレーを身につけるための「なじみの地平」が発生している居心地のよい場、嫌な気分がしない場であったと考えられる。

しかし一方で、B氏の「左（手）でやってミスしたときに、なんか（指導者に）怒られるんじゃないかっていうので、あんまり使いづらい感じではあったんですけど。なんか、（周囲が）微妙な空気になるかなみたいな感じで、躊躇してました」という語りから、自

¹⁰ 受動地平：「われわれの意図的な行動の基底としていつも無意識的に作動しているもの」（市村・中村，2018，56）。

主練習以外の場では，B氏に「なじみの地平」が生じておらず，運動が行われる場からの忌避感情が窺える．このことについて，金子（2002，p.409）は「受け手に〈なじみの地平〉が生じないのであれば，〈伝える－覚える〉という関係系は成立するはずもない」と運動伝承における原志向位相での「なじみの地平」の不可欠性を指摘している．つまり，指導者には学習者に対して怪我などの突発的な契機ではなく，意図的に非利き腕の技術習得を促し，なおかつ非利き腕を使うことに忌避感情を抱かず躊躇することのない肯定的な言葉がけや場づくりの工夫が求められると考えられる．

第5節 まとめ

研究Ⅰでは，はじめに，個人戦術力を自然科学的手法で捉える問題点について述べ，自然科学的手法による数量化では検討することができない個人戦術力を現象学的手法で捉える意義について論述した．その上で，育成年代のハンドボール選手における非利き腕プレーの個人戦術力に関する基礎的な知見の獲得を目的とし，国内トップリーグでのプレー経験のあるハンドボール選手男女2名を対象に半構造化面接によるインタビュー調査を実施した．その結果，以下の4点が明らかになった．

1) 両者から，非利き腕プレーにおける自己身体の動感身体知として捉えられるコツ身体知と状況関係の動感身体知として捉えられるカン身体知の語りが得られた．しかし，ここで語られたコツ身体知は非利き腕だけでなく，利き腕での動作でも共通する内容である

ことが指摘される。

2) 非利き腕プレーにおける固有の知とは、単に非利き腕での動作が可能になるという程度の能力だけではなく、「利き腕での攻撃戦術意図を対峙する防御者に先取りさせる知」であると同時に個人戦術力の一つであると考えられる。

3) 非利き腕プレーを試合で具現化させるためには、単に非利き腕での動作を反復するだけのトレーニングでは不十分であり、指導者は学習者に対して、非利き腕での動作をできるようにするための動感素材を呈示することに加えて、対峙する相手防御者の動感意識を読み解くことを前提とした未来の動き方を予描できるカン身体知を絡めた動感素材を呈示することが求められる。

4) 非利き腕プレーを習得する過程において、指導者には学習者に対して怪我などの突発的な契機ではなく、意図的に非利き腕の技術習得を促し、なおかつ非利き腕を使うことに忌避感情を抱かず躊躇することのない肯定的な言葉がけや場づくりの工夫による「なじみの地平」の形成が求められる。

第3章 研究Ⅱ：非利き腕プレーに関するキネステーゼの発生を提示した事例研究

第1節 研究Ⅱの目的

研究Ⅱでは、男子中学生ハンドボール選手1名を対象に本研究者である指導者が研究Ⅰで得られた知見に基づき、非利き腕プレーの促発指導を実施した。そして、促発指導を通して対象者がどのように非利き腕プレーのコツ身体知とカン身体知の統一体であるキネステーゼ（動感）を発生させ、その個人戦術力を変容させていったのかを現象学的手法を用いて明らかにすることを目的とした。

第2節 方法

第1項 対象者

対象者は、〇中学校男子ハンドボール部に所属するC選手1名である。対象者は、個人戦術力としての非利き腕プレーを身に付けていないことと後述の対象とする非利き腕プレーとポジションの関係を考慮した上で、本研究者が研究目的を達成するためにふさわしいと判断し、協力を依頼したものである。C選手のプロフィールは以下の通りである。

対象者：C選手

年齢：15歳

性別：男性

利き腕：右

非利き腕：左

ポジション：ライトバックプレーヤー

主な戦績：全国大会出場

対象者と代諾者には，本研究の趣旨や調査内容について事前に文書（資料3）にて十分に説明し，調査への協力を依頼し，承諾を得た．調査に先立ち，調査への参加は対象者の自由意志によるものであり調査への参加を随時，拒否できること，加えて，拒否によって協力者が不利な扱いを受けることは無いことを伝え，調査内容の音声および映像記録，研究成果の公開に関して了解を得た．

第2項 対象とする非利き腕プレー

球技における運動の側性について，先行文献において，片側だけの練習をしている人はポジションに特有の戦術的要求が達成しづらい場合があること（デーブラー，H，1985，p.282），両利きはポジション独自の課題を解決する際に大きな効果を上げること（G.シュテラーら，1993，p.37）が報告されている．

また，研究Ⅰにおいて，B氏は「（非利き腕を使えるようになる前は）左手（非利き腕）を使えないから（ライトバックで）アウト・イン（切り返し）しても，結局守られる．肩も入れづらいし，あまりズレないっていうところがあったんですけど．（非利き腕プレーを）習得してから，スピードの出方とか肩の入れ方とかも変わってくるから，より

シュートにはいきやすくなったかなって感じがしますね」と語っている。

以上，先行文献やB氏の語りから非利き腕プレーがゲーム状況を合目的的に解決できるかどうかの要因にポジションが大きく関与していると推察される．つまり，プレーヤーの非利き腕とポジションは相互に影響し合っているといえる．したがって，研究Ⅱで対象とする非利き腕プレーは，C選手と研究ⅠのB氏の非利き腕とポジションが同じことを考慮し，B氏の得意としている非利き腕プレーである「1対1の攻防局面において，防御者を攻撃側から見て左側に躲してから打つ非利き腕（左腕）でのカットインシュート」（写真2）とする．

第3項 スポーツ運動学における運動指導

スポーツの指導者に求められる重要な役割の一つとして，そのスポーツにおける効率的，合理的な動作を知り，その動作を目標として選手に身につけさせることが挙げられる．

ハンドボールに関する先行研究を概観すると，バイオメカニクス的手法を用いて熟練者と非熟練者のジャンプシュートについて比較分析した研究（Wagner et al, 2010）やスキルチェックリストを用いて女子ハンドボール選手の7mスローのシュートフォーム改善について検討した研究（中村・松見，2009）等により，目標となる動作が提示されてきた．

しかし、このような先行研究から指導者が目標となる動作を知ることができたとしても、どのようにすればその動作を選手に身につけさせることができるのかまでを知ることができない。そのため、実際の指導現場では指導者が目の前にいる選手の動きと目標となる動作の外面的特徴（長さや角度、速さ等）の違いだけを指摘することだけに終始し、肝心の動作習得が選手自身の努力に丸投げされていることが少なくはない。つまり、指導者はいくら効率的、合理的な動作を知ったからといってその習得を選手の努力のみに頼り、動作を身につけさせることができなければ、指導者としての責任を果たしているとはいえないのである。

金子（2005a, p.177）は、このような態度を指導者の野次馬的態度であると批判し、指導現場で求められているのは選手の運動指導に切迫性を持った促発指導者であると指摘している。したがって、現場の指導者には選手一人ひとりの運動学習に積極的に関与し、目標としている運動の発生を促すことが求められる。

スポーツ運動学において、運動学習は「学習者が新しい動きかたを自ら生み出すこと」、運動指導は「指導者が学習者に新しい動きかたの発生を促すこと」と捉えられ、前者は「創発」、後者は「促発」と呼ばれている（金子, 2005a, p.83）。つまり、スポーツ運動学の立場では指導者が選手の運動創発に関与し、それを促進することが促発であると同時に運動指導（促発指導）と捉えられている。

促発指導者における指導過程について、岡端（2018, 3-4）は「指導者は、『外部視

点からとらえた表面的な動き』ではなくて，学習者の意識的，無意識的な，すなわち能動的，受容的，そして受動的な地平にある動感をよく見て(動感観察¹¹)，よく聞き(動感交信¹²)，そしてこの学習者にはどんな動感がよいのかをよく考えて(動感代行¹³)，そしてどういった道しるべでもって，また，伝えかたはストレートがよいのか，それとも婉曲的にかという慎重さをもって指導に当たらなければなりません(動感処方¹⁴)」と説明している．

以上の論述から，研究Ⅱでは対象者の動きと対象とする非利き腕プレーの外面的特徴の違いだけを指摘するような指導ではなく，学習者の内面的動感意識への観察・交信・代行・処方による促発指導の事例を取り上げる．加えて，この促発指導は研究Ⅰで得られた知見を基に実施された．

第4項 現象学的反省分析

本研究では，本研究者である指導者による中学生ハンドボール選手に対する非利き腕プレーの促発指導事例を取り上げている．そこでは指導者がどのように非利き腕プレーの促

¹¹動感観察：「指導者が学習者の運動のなかに，その多様な動感志向性を読み解き，見分けること」（金子，2005b，p.143）．

¹²動感交信：「指導者と学習者とのあいだに動感感覚的な相互理解を生み出すための有体的な動感情報の交換」（金子，2005b，p.193）．

¹³動感代行：「指導者が学習者の代わりに，まだ未習得の動感形態を潜勢的に統覚ないし修正として形態化すること」（金子，2005b，p.202）．

¹⁴動感処方：「動感形態の発生を促す〈中略〉方法を学習者に呈示すること」（金子，2005b，p.222）．

発を行い、対象者がどのようにそのコツ身体知とカン身体知を創発していくのかを明らかにしていくことを試みる。しかし、このような促発と創発の営みを対象に分析する際、学習者の意識の中で発生する「運動と感覚の不可分の統一体」である「キネステーゼ（動感・運動感覚）」（金子，2005a，p.25）が主題化されるため、運動を外部視点から客観的に分析し因果法則を導こうとする自然科学的手法ではなく、個人の内在体験を起点に本質法則を追求する現象学的手法を用いる必要がある（中村，2015，3）。

また、本研究のような指導者の指導事例を分析する際、中村（2013，14）が指摘しているように、現場で毎日のように試行錯誤を繰り返している指導者の経験は反省的分析を施さなければ意識化されづらい。反省について、M.メルロー＝・ポンティ（1967，p.89）は「非反省的なものの自体は、ただ反省によってしかわれわれに知られない〈中略〉。反省の具体的行為を行う中で、〈中略〉私は自分が知覚していたものを知ることができる〈後略〉」と述べているが、ここでの「反省」は一般的な意味での反省ではなく、現象学的に基礎づけられた反省という意味で理解されなければならない。

現象学的反省について、フッサール（2001，pp.69-76）によると、「反省の課題は、もとの体験を反復することではなく、それを観察し、そのうちに見出されるものを解明すること」であり、そこでは「以前の体験を今ここに引き寄せてそれを生きる自我」と「その体験を生きることそのものを無関心な傍観者として眺める自我」に分離させることで、自己の体験が私的な思い込みや先入観から離れて冷静に観察されることになる。そし

て、そのなかで当該の体験にとって必要不可欠なものと、そうではないものが分けられ、前者が本質として取り出される（谷，2002，p.142）。

しかし、このような現象学的反省分析を行うためには、自身が自らの体験にとって本質だと思ったことを、さらに自身で疑うという厳密な思考態度が必要となる。つまり、徹底した「自己変貌（脱主観化）」への努力が要求される（古東，2005，p.132）。この非常に困難に思える自己変貌（脱主観化）への努力を厳密化する上で、藤本ら（2016，p.49）は「他者との対話」の有効性を取り上げ、自問自答に加えて、他者が自分に質問したり自分が他者に確認を取ったりすることにより独善的な反省を回避しようとしている。

以上の論述から、研究Ⅱでは非利き腕プレーにおける指導者の促発と学習者の創発の営みを分析する手立てとして、現象学的反省分析を採用し、自己変貌（脱主観化）への努力を厳密化するために他者との対話を取り入れる。

第5項 現象学的反省分析の方法と内容

本研究の反省分析は3段階に分けて行われた。まず第1段階では、研究Ⅰで得られた知見に基づき、本研究者である指導者がC選手に対して、非利き腕プレー「1対1の攻防局面において、防御者を攻撃側から見て左側に躲してから打つ非利き腕（左腕）でのカットインシュート」の促発指導を実施し、C選手の様態が変容する過程をビデオで映像撮影し、指導中の会話内容を観察日誌に記述した。第1段階の調査期間は2022年8月24日～

8月29日である。

続いて第2段階では、ビデオ映像と観察日誌から促発指導の過程を本質的意味の単位場面に区分した。

第3段階では、スポーツ運動学を専門とし指導者として活躍した経験のある研究者1名（以下、D氏）に協力を求め、D氏と対話をしながら区分した各場面に意味付与を行った。

第3節 結果

第1項 原志向位相における非利き腕プレーのなじみの地平

まずはじめに、指導者は本研究の促発指導を行う前から育成年代のハンドボールにおける非利き腕の技術習得の必要性を感じており、C選手が所属しているチーム全体に対して非利き腕を使った動きの簡単な技術指導を実践し、C選手自身も中学1年生の頃（2020年4月）からその指導を受けていた。具体的な練習として、戦術的思考力はあまり求められず技術力を主とした非利き腕での簡単なパスやキャッチの練習に始まり、戦術的思考力と技術力の両方が求められるパスゲームやゴールキーパーと1対1でのシュートの練習まで様々であった。その際に、指導者は選手たちが非利き腕を使った動きに忌避感情を抱かないような雰囲気づくりや言葉がけに注意していた。具体的には、非利き腕を使った動きへの挑戦に対しての肯定的な言葉がけ、非利き腕でのシュートによる得点を2点以上に設

定すること、非利き腕を使った動きができるようになった場合にプレーの幅が広がることの伝達等である。

その結果、指導者はC選手が所属しているチーム内において非利き腕を使うことに対しての否定的な雰囲気は感じ取れず、むしろ非利き腕を使った動きに対して肯定的な雰囲気を感じ取っていた。実際にC選手以外にも多くの選手が非利き腕を使った動きを実践しており、指導者はその様子を数多く観察している。以上の背景がある中で本研究の促発指導は始まった。

第2項 探索位相における固有の知への触発¹⁵

2022年8月24日、前述の背景がある中で、まず防御者がC選手（攻撃者）に対して正対できていない状況から1対1を行う練習（以下、ズレた1対1）（図3）を実施した。この練習のねらいは、研究ⅠでB氏が「重要なのが、（防御者に対して）半身ズレた位置を取っとくっていう部分〈中略〉2枚目（防御者）が遅れてみたいな感じで、（切り返しの判断の）感覚（を）掴んでいくのが一番いい」と述べていたように、切り返しの動きをせず利き腕でシュートを打つのか、切り返しの動きを行い非利き腕でシュートを打つのかという判断に意識を向けさせることであった。幸いなことに、切り返しの動きを行う際のステップワークは非利き腕特有のものではなく、利き腕でプレーする際にも用いることがある

¹⁵触発：「私の運動意識を誘う何らかの呼び起こし」（金子，2002，p.419）。

ものであるため、C選手は防御者がいない状況では何の苦も無く切り返しの動きから非利き腕でシュートを打つことができていた。

ズレた1対1を実施する上で、指導者は「非利き腕プレーをすること自体が目的にならないようにしてほしい。あくまで非利き腕プレーは攻撃の目的である得点のための方法の一つとして捉えておいてほしい」という思いがあったため、C選手に対して「(利き腕の)カットイン(シュート)いけるんやったら(利き腕の)カットイン(シュート)で、まずは(利き腕の)カットイン(シュート)ありきで。最初から切り返すことはあんまり考えずに」と言葉がけを行い、C選手も「はい」と返答していた。そういった言葉がけの影響もあり、ズレた1対1の当初、C選手は積極的に利き腕でのシュートを打っていた(写真3⑧-⑫)。

しかし一方で、切り返して非利き腕プレーをしようとする防御者に正面から接触され防御者を突破することができない現象が多く見られた(写真4⑦-⑫)。指導者は、この現象の原因を「C選手が切り返さないか切り返すかの判断を確実に行うことにこだわりすぎてしまい、その結果、利き腕のシュートを狙っていないことが防御者に先読みされているからではないか」と考えた。なぜなら、C選手に対峙している防御者がC選手の切り返しの動きを待つような位置取りや身体の向きをしており、利き腕のシュートを守りにいくような感じではなかったからである(写真4④-⑥)。

指導者は、ズレた1対1の狙いとして当初設定していた「切り返しの動きをせず利き腕

でシュートを打つのか、切り返しの動きを行い非利き腕でシュートを打つのかという判断に意識を向けさせること」が、このできない現象の原因の一端を担ってしまっていたのではないかと感じた。そのため指導者は、切り返すか切り返さないかの判断の意識よりも利き腕のシュートを狙う意識にC選手を志向させるため「相手をよく見て判断しようとしているのはそれでええけど、自分がディフェンス（防御者）をよく見ているときは相手も自分をよく見ていることもあるから考えすぎへんようにしよ。まずは、（利き腕の）カットイン（シュート）狙って。」と伝え、C選手は「はい」と返答した。

しかし、この後の練習でC選手は利き腕のシュートが打てる（防御者が非利き腕側への切り返しを待っている）にも関わらず、非利き腕側に切り返そうとし（写真5⑤-⑥）、だが途中で防御者をかわせないことを感じ、利き腕側へ再度切り返し（写真5⑦）、非利き腕でシュートを打つ（写真5⑧-⑫）という明らかに迷いながらのプレーを行った（写真5）。指導者はC選手に対して「今のはどんな感じやったん？」とこの時の感覚を借問¹⁶すると、C選手は「あの勢いでいったら来てくれると思ったんですけど…思ったより来てくれなくて…」と答えた。指導者は、C選手の迷いながらのプレーや困惑している表情を観察したのと同時に、自身が選手だった頃を思い返した。それは自身が予測していた通りに

¹⁶ 借問：「単に質問したりインタビューして学習者の考えていることを聞くのではなく、指導者が学習者に次々とたたみかけるように問いかけていき、そこで語られることばかりから学習者の微妙な動感地平の内実までも聞き出すとともに、学習者の動感意識を紡ぎ出していくこと」（金子、2005b, p.199）。

防御者は動かず，自身の思い描いたプレーができないという感覚であり，指導者はそのことを想起しながらC選手の感覚に共感し，「うん，せやんな」とC選手に言葉をかけた．

また，指導者は借問の際に「C選手は自身のプレーの振り返りができており自身が防御者に守られたという事実を捉えてはいるが，なぜ守られたのかが理解できていないのではないか」と考え，改めてC選手に利き腕のシュートを狙う意識を志向させるために「結局，ディフェンス（防御者）がこっち（非利き腕側）で待ってるから，まずは（利き腕の）カットイン（シュート）いこ」と伝えた．しかし結局，初回のズレた1対1の練習では，惜しい場面はいくつかあったもののC選手が非利き腕プレーを成功させることはできなかった．

第3項 偶発位相における固有の知の発生

初回の練習日から5日後の2回目の練習日の際，ズレた1対1を実施する前に，指導者は「防御者を含めた周囲の状況を把握すること」，「まずは利き腕のシュートを狙うこと」を意識させるためにチーム全体に対して「常に前を見て状況を把握できるようにしよう」，「フェイントは結果やから，フェイントをかけに行こうとしない．まずはスペースヘカットイン．スペースにディフェンス（防御者）が来たら切り返す」と伝えた．何回か練習をしていく中で，C選手は積極的に利き腕のシュートを打ちにいき，防御者が利き腕のシュートを守りにきていないのに非利き腕側へ切り返そうとする様子は見せなくなってきた．

そして、練習を数回繰り返したある時、C選手は突然非利き腕プレーを成功させた（写真6）。指導者はC選手が初めて非利き腕プレーを成功させた直後に「今のは何か意識したことあるん？」と借問を行い、それに対してC選手は達成感のある表情と少し興奮した感じで「いや、もう思いっきり行って、来たら切り返そうと思って」と返答した。この返答に対して指導者は、C選手が何か手ごたえのようなものを掴んだ様子を窺えたが、それがまだ曖昧で不鮮明なものではないかと感じた。

また指導者は、もう少しこの時の意識を深掘りした方がいいのではないかと考えたものの、C選手がどちらかというと相手との駆け引きが苦手であり駆け引きを意識しすぎると思い切ったプレーができなくなる心配があったため深掘りすることを避け、C選手との会話の最後に「深く考えすぎらん方がいいんかもしらんな」と伝えた。

加えて、今回の促発指導はチームの全体練習を行いながら実施されたものであり、C選手だけの指導の場を設定したものではなかった。チームの全体練習は毎回20人程度の選手で行われており、今回のズレた1対1の練習も18人の選手が攻撃役と防御役を入れ替わりながら、且つ逆側のポジションでも行われている状況であった。そのような中、C選手は指導者から指示されたわけではないのに、防御役をすることも逆側のポジションの攻撃役をすることもなく、この練習中はずっと同じポジション（ライトバック）の攻撃役の練習に取り組んでいた。指導者はC選手のこのような姿を観察し、C選手が自発的に非利き腕プレーの習得を志向していると感じた。

第4項 形態化位相における固有の知への起点構成化

ズレた1対1を練習する中でC選手は、防御者に接触されながらドリブルをした非利き腕プレー（以下、ドリブル有りの非利き腕プレー①）を成功させた（写真7⑤-⑫）。このプレーに対して指導者は違和感を覚えた。なぜなら、C選手はディフェンスが非利き腕側にいるにも関わらず切り返してしまい（写真7③-⑤）、その結果防御者に接触されながらドリブルをしたためである（写真7⑦-⑩）。ドリブル有りの非利き腕プレー①の直後、指導者はC選手に対して「ドリブル無しでもいいけそう？」と問いかけ、C選手は「いや、多分いいそうなんすけど…」と答えた。指導者はC選手の発言の続きを促すために「なんすけど…？」と再度問いかけたが、C選手は言葉が詰まり悩みながら無言になってしまったため、指導者は「来させきれず接触されてるから？」と続け、C選手は「はい…多分」と悩みながら返答した。

その後、練習を続ける中でC選手は、防御者に接触されていないにも関わらずドリブルをした非利き腕プレー（以下、ドリブル有りの非利き腕プレー②）を成功させた（写真8⑤-⑫）。このプレーに対しても指導者は違和感を覚えた。なぜなら、今回はドリブル有りの非利き腕プレー①と違い、防御者に接触されておらずドリブルをする必要がなかったためである（写真8④-⑦）。ドリブル有りの非利き腕プレー②の直後、指導者はC選手に対して「今のは何でドリブルついたん？」と問いかけ、C選手はゆっくり時間をかけ熟考し「…なんで？…あんまり考えてなかったです」と答えた。指導者はC選手が未だ非利き

腕プレー全体の動きの流れを掴めていないと感じ「切り返した後のことを考えてなかったってこと？」と問い直し、C選手は「あ、はい。そうです」とハッとしながら返答した。

指導者は非利き腕プレー全体の動きの流れに加えて動きのポイントとなる部分をC選手に掴ませるために「ここまでをイメージしたほうがスムーズにできるんかもせえへんな」と動き（助走、ストップ、2歩のステップ）を実演しながら伝えた。特に、その中でも動きのポイントとなる切り返しの部分であるストップとストップ直後の1歩目を強調しながら伝えた。このやり取りの後、C選手は指導者が実演した動きの真似を何度も繰り返していた。

以後の練習でC選手は前回の練習と同様に防御役をすることも逆側のポジションの攻撃役をすることもなく、この練習中はずっと同じポジション（ライトバック）の攻撃役の練習に取り組んでいた。

指導者は、ズレた1対1の次に、より試合に近い状況であるフリーの4対4の練習（以下、フリーの4対4）（図4）を実施した。この練習の狙いは、自身をマークする防御者に対して如何にしてズレた状況を作るかという位置取りに意識を向けさせることと、ズレた1対1よりも防御者が利き腕側のシュートを守りやすい状況で如何にして非利き腕プレーを成功させられるかであった。この練習の間、指導者はC選手に対して何度も「まずは前を見ながら位置取りから」と伝え、C選手もそれに対してうなずきながら反応していた。

その結果、C選手はフリーの4対4において非利き腕プレーを成功させた（写真9）。ここでは、C選手はボールをもらう前に防御者に対して利き腕側のズレた位置を取り（写真9①-③）、利き腕側へのシュートを狙いながら防御者が来るのをストップ動作で待ちつつ（写真9④）、非利き腕側へ切り返して非利き腕でシュートを放った（写真9⑤-⑫）。

この成功の直後、指導者とC選手の間で以下のやりとりがなされた。

指導者：「今のは何を意識したん？」

C選手：（身振り手振りを加えながら冷静に説明するように）「秦（隣のポジションの味方）が（防御者を）寄せてくれて、大智（防御者）がセンター（隣のポジションの味方）を見とったんで、自分がアウト攻める意識を見せようと」

指導者：「2枚目（防御者）がどこを見てるのかも大事だな」

C選手：（間髪入れずに）「はい」

指導者：「何でアウト割り（カットイン）じゃなくて切り返したん？」

C選手：（間髪入れずに）「（防御者が）急いで来たんで」

指導者：「それは見えとったん？」

C選手：（間髪入れずに）「はい」

指導者：「それは（C選手が）ボールを持ってから、（防御者が）急いで来てるっていう感じなん？それともボールが空中にある中で見とったん？」

C選手：（間髪入れずに確信を持った感じで）「（ボールが）空中にある時に、大智（防

御者）が秦（隣のポジションの味方）のどこ見とって、もらう寸前に（防御者が）ダッシュで来たんで」

指導者：「そこまで見えてたら判断できるわな」

C選手：「はい」

指導者は一連のプレーと上記のやりとりから、C選手が非利き腕プレー全体の動きの流れを掴んでいることやその動きの中で防御者を観察できていることを確認した。

第4節 考察

第1項 非利き腕プレーに関するキネステーゼの発生様態

ここでは、一連の指導と学習の営みの過程において、ハンドボールにおける非利き腕プレーができるようになるためのキネステーゼがどのように発生するのかについて考察していく。

まず、本研究の促発指導が行われる前にC選手は、スポーツ運動学に関する知見を有している指導者から非利き腕を使った簡単な技術指導を受けており、且つその技術指導はC選手が所属しているチーム全体に対して行われたものであった。その際、指導者は選手たちが非利き腕を使うことに対して忌避感情を抱かないような言葉がけを行っており、その結果、指導者は非利き腕を使うことに対してチーム内が肯定的な雰囲気にも包まれていることを感じ取っていた。

スポーツ運動学では、動きができない段階からできる段階までの過程をキネステーゼの形成位相論として取り上げ、原志向位相、探索位相、偶発位相、形態化位相、自在位相の5つに分けて考えている（金子，2002，pp.418-430）。その中でも、動きを知ってからやってみるまでの段階に含まれる原志向位相では、まずその動きをやってみようと思うことが必要であり、「第一に、コツの住む運動感覚図式に対して、感情的に嫌がらないで、それと違和感なく共生できるという『なじみの地平』を認めること」（金子，2002，p.247）が重要となる。このなじみに関連して、中村（2007，249）は、運動になじみをもつとは、「その運動に関連する経験をもとに、その運動を自分に身近なものとして感じること」であると述べている。つまり、C選手は本研究で取り上げている非利き腕プレーに対して、感情的に嫌がらないで自分に身近なものとして感じていたと考えられる。すなわち、C選手には非利き腕プレーのなじみの地平が発生していたと捉えられる。

次に、初日のズレた1対1での練習の当初、C選手は切り返しの動きをせずディフェンスを突破し利き腕でのシュートを数多く成功させていた（写真3⑦-⑫）。その一方で、切り返して非利き腕プレーをしようとする防御者に正面から接触され防御者を突破することができない現象（写真4⑥-⑫）を引き起こしていた。この現象は、防御者がC選手の切り返してからの非利き腕プレーを先取りしていることに起因し、言い換えれば、非利き腕プレーの固有の知である「利き腕での攻撃戦術意図を対峙する防御者に先取りさせる知」が、この段階のC選手には発生していなかったことを示唆している。

続いて、C選手は指導者から利き腕のシュートをより狙うことを伝えられた後に、迷いながらのプレー（写真5）を現出させた。その様子はまさに、金子（2007, p.269）が述べている「生徒がそう動きたいと思ってもやり方がわからなくてさぐり地平でさまよい続けている」姿を表していた。この段階は、キネステーゼの形成位相論において、いわゆるコツやカンの〈予感的探り入れ〉が行われる探索位相の段階であり「そのコツが何となくわかるような気がする」といった特徴が挙げられる（金子, 2005a, p.65）。

次に、C選手が初めて非利き腕プレーを成功した（写真6）直後に語った「いや、もう思いっきり行って、来たら切り返そうと思って」という曖昧な言葉から、非利き腕プレーが初めてできたものの、まだこの段階のC選手には非利き腕プレーのコツやカンが定着していないと考えられる。一方で、C選手が指導者から指示されたわけではないのに、防御役をすることも逆側のポジションの攻撃役をすることもなく、この練習中はずっと同じポジション（ライトバック）の攻撃役の練習に取り組んでいた事実は、まさに金子（2005a, p.66）が述べている「今度こそコツがつかめそうだ」とか「今度はカンに出会えるかもしれない」という期待に満ち、夢中になって練習にのめり込んでいる姿であり「『できそうな気がする』という体感能力に支えられながら、的外れの動感意識を切り捨て、なじみのもてるいい感じの動感意識を統覚して、図式化に向かって」行く過程を表しているものと考えられる。この段階は、キネステーゼの形成位相論において、いわゆる〈まぐれ当たり〉が発生し始める偶発位相の段階であり、「できそうな感じがする」といった特徴

が挙げられる。

最後に、C選手がより試合に近い状況で非利き腕プレーを成功した（写真9）直後にC選手と指導者の間で以下のやりとりがあった。

指導者：「今のは何を意識したん？」

C選手：（身振り手振りを加えながら冷静に説明するように）「秦（隣のポジションの味方）が（防御者を）寄せてくれて、大智（防御者）がセンター（隣のポジションの味方）を見とったんで、自分がアウト攻める意識を見せようと」

指導者：「2枚目（防御者）がどこを見てるのかも大事やな」

C選手：（間髪入れずに）「はい」

指導者：「何でアウト割り（カットイン）じゃなくて切り返したん？」

C選手：（間髪入れずに）「（防御者が）急いで来たんで」

指導者：「それは見えとったん？」

C選手：（間髪入れずに）「はい」

指導者：「それは（C選手が）ボールを持ってから、（防御者が）急いで来てるっていう感じなん？それともボールが空中にある中で見とったん？」

C選手：（間髪入れずに確信を持った感じで）「（ボールが）空中にある時に、大智（防御者）が秦（隣のポジションの味方）のそこ見とって、もらう寸前に（防御者が）ダッシュで来たんで」

指導者：「そこまで見えてたら判断できるわな」

C選手：「はい」

上記のやりとりから，より試合に近い状況での非利き腕プレーにおいてC選手は防御者の視線を観察すると共に防御者の動きかたを把握しており，さらにその状況に応じた動きかたをしていたと考えられる．この段階は，キネステーゼの形成位相論において，「私のコツやカンはしだいに身体化されて，〈中略〉いわゆる〈できる〉という，いちおうの確信がもてる段階」である形態化位相である（金子，2005b，p.164）．

上述したC選手のキネステーゼに関する発生様態を概観すると，そこにはキネステーゼの形成位相が浮かび上がってきた．金子（2005a，p.68）は，「指導者に求められる動感促発の分析能力を身につけるために，〈中略〉形成位相の体験実習を通して，動感形成の査定分析能力を欠かすことができない．〈中略〉動感位相の査定能力は指導者に不可欠の専門能力になる」と指摘している．次項では，この指導者の動感形成の査定分析能力を基にどのような促発指導が行われたのかを考察していく．

第2項 起点構成化の発生を促した促発指導

ここでは，ハンドボールにおける非利き腕プレーについて，指導者がC選手に対してどのような促発指導を実践したのかについて考察していく．

まず，本研究の促発指導の当初，指導者はC選手を含めたチーム内の多くの選手が非利

き腕を使った動きを実践していることを観察しており、非利き腕を使った動きに対するチーム内の肯定的な雰囲気を感じ取っていた。指導者の指導方法論に関する指摘として、金子（2002, p.419）は、「運動伝承の営みのなかで、このような何となくといった『雰囲気的な気分』や『全身で感じ取る状態の感情』の原志向性に注目しながら、生气づけられた運動伝承の場づくりをする方法論こそが問われているのだ」と述べている。つまり、指導者はC選手が非利き腕を使うことに対して肯定的な感情を持つような場づくりをした上で、非利き腕プレーの促発指導に入っており、それはC選手のみならずチーム全体にまで影響を及ぼしているものと考えられる。

次に、初日のズレた1対1での練習の際、指導者は非利き腕プレーをしようとするC選手が防御者に正面から接触される現象（写真4⑦-⑩）を観察した。この現象から、この段階のC選手には非利き腕プレーの固有の知である「利き腕での攻撃戦術意図を対峙する防御者に先取りさせる知」が発生していなかったことが考察できるが、この先取りさせる知は「利き腕でシュートを打つことができる」状態で「ストップすることができる」等のコツ身体知と「防御者の意識（視線）を感じ」つつ「防御者が利き腕を守りに来るのを待つ」等のカン身体知が複雑に絡み合って洗練された動感身体知である。このような動感身体知は、そもそもカン身体知を具現化するための前提となるコツ身体知がつかめていないC選手にとっては非常に複雑な内容である。そのため、この段階で解決しようとする、かえって混乱を招きかねない。それにも関わらず、指導者はこの段階のC選手に対して

「切り返しの動きをせず利き腕でシュートを打つのか，切り返しの動きを行い非利き腕でシュートを打つのかという判断に意識を向けさせること」を練習のねらいとしていたことに問題があったといえる．つまり，目指すべき動感身体知を知ることが重要だが，その動感身体知が必ずしもどの習熟段階の学習者にとっても有益であるとは限らず，むしろ習熟段階によっては学習者の運動を促発させる上で不利益になる場合もあると指摘することができる．

続いて，指導者はC選手の迷いながらのプレー（写真5）や困惑している表情を観察した．この直後にC選手が語った「あの勢いでいったら来てくれると思ったんですけど…思ったより来てくれなくて…」という言葉はまさに，金子（2005b，p.161）が述べている「学習者が見当もつかず，五里霧中のなかにさまよっている〈中略〉，動感指導者の手引きが求められている学習場面」を表すものであった．指導者は，このような動感のC選手に対して，自身が選手だった頃の経験を想起し「うん，せやんな」と言葉をかけ，この動感に寄り添いながら共感している．金子（2005b，pp.119-121）は，この伝え手と受け手が共に動感を共有することを〈動感出会い〉と呼ぶと同時に，〈動感出会い〉が成立しなければ，運動の伝承は大きく妨げられると指摘している．つまり，新しい運動に挑戦する学習者の初期の習熟段階においては，複雑な動感指導よりも，学習者自身の動感に共感し寄り添うことの方が重要であると考えられる．

指導者は，借問と観察によってC選手が非利き腕プレーの固有の知を発生させていない

ことを確認している。これは、指導者が予め非利き腕プレーの固有の知を知悉しており、目標とする運動の動感とC選手が持ち合わせている動感の違いを捉えることができたためと考えられる。つまり、指導者はC選手の外面的な動作のみに注目するのではなく、C選手が状況をどのように捉え、自身の身体をどのように動かそうとしているのかという内面的な動感を把握しようとしていたと解釈できる。指導者が学習者の運動を観察するときの注意点として、金子（2005b, p126）は、「学習者における生身の今ここの運動を見る時、その動感運動の受け手に潜むコツ身体知やカン身体知の世界を読み取ることができなければ、〈中略〉学習者が苦悩している動感世界のなかに共生できず、動感志向の相談相手にもなれないまま、外部からの学習活動の管理だけに終始しては、運動指導の意味核を形づくる動感発生に深く関わり合うことはできない」と述べ、指導者と学習者の動感を含めた運動の共通認識の重要性を指摘している。

また指導者は、借問の際、この段階のC選手に防御者が自身の利き腕のシュートを防御しようとしているかについてのカンが働いていなかったことを確認している。金子（2005b, p.30）は、コツとカンの関係について、「コツ身体知がどんなに自在の形成位相に達していても、〈中略〉状況に適応できない動きかたをするならば、つまり、カンに支えられていないコツは、場違いの空回り」であると指摘している。つまり、この時のC選手は、防御者が非利き腕プレーを先取りしている状況に適応できない動きかたをしてしまっていたと考えられる。このような状態で苦悩している学習者は指導者の〈目当て道しる

べ〉を欲しがっており、まぐれでも、ある動感形態が成立すると、それが励みになって味気ない反復練習にも耐えられる。(金子, 2005b, p.161). そのため、指導者は〈目当て道しるべ〉となる「防御者を含めた周囲の状況を把握すること」という意識すべき優先順位を与えることで、C選手の初めての非利き腕プレーを促発することに成功した(写真6).

しかし、指導者は、この時のC選手への借問の際に、C選手の非利き腕プレーのコツとカンがまだ曖昧で不鮮明なものであると確認している。金子(2002, pp.253-254)は、コツの偶発性について「コツは、本人が何ひとつ予測できないままに偶発的に出現するので、他人からはきわめて秘密に満ちたものに見える〈中略〉。それは、いわば、まぐれの出現なのであり、その本人にもはっきりわからないのだから、儚く頼りないものに感じるのも無理はない」と述べている。つまり、この時のC選手の非利き腕プレー(写真6)は偶発的に成功した〈まぐれ〉であると解釈することができる。

続いて、金子(2005b, p.163)が「まぐれの観察分析で重要なことは、指導者はまぐれの質を評価できる観察能力をもっていなければならないことです。〈中略〉悪いまぐれがそのまま定着してしまうと、後からの修正がきわめてむずかしくなりますから、指導者はそれを見逃してはなりません」と指摘しているように、指導者は、C選手のドリブル有りの非利き腕プレー②の成功(写真8)に違和感を覚え、C選手にこの時の動感について借問を行った。その結果、指導者は、C選手が非利き腕プレー全体の動きの流れを掴め

ていないことを確認している。

金子（2005b, p.41）は、運動がまとまりをもって成立する上で〈動感メロディー¹⁷〉の構成化が不可欠であると指摘している。つまり、借問によって明らかになったC選手が切り返しの動きの後のことを考えられていなかった事実は、まさに非利き腕プレー全体の動感メロディーがこの時のC選手のなかで奏でられていなかったことを示している。そして、その事実を捉えた指導者はC選手に〈動感メロディー〉を構成化させるために、自らの身体を動かしながら非利き腕プレー全体の動きの流れを実演しながら伝えた。その際に、指導者はこの時のC選手にとって「どれがコツの成立に有効な動感素材なのか、どれがコツから離れている動感素材なのかという価値判断」（金子, 2005b, p.36）をした上で、ストップの動きとその直後の1歩目の動きの感を強調しながら伝え、その結果、指導者はより試合に近い状況での非利き腕プレーの促発に成功している（写真9）。

この一連の促発指導において、金子（2005b, pp.245-246）は「学習者の動感志向体験に合わせた方向道しるべに沿って目当てを確認し、その選ばれた動感呈示内容をどんな状況になれば、いつ促発の営みを開始してよいかを判断する決定的な重要性をもつ促発身体知」である〈起点構成化能力〉にとりわけ注目し、〈起点構成化能力〉が内在して

¹⁷動感メロディー：「私が動きつつあるなかで、こんなリズム感でどのように動くのかという動く感じが統一的に時間化された流れに乗って、私のなかで奏でられる統覚化身体知の一つ」（金子, 2005b, p.41）。

いない指導者は、学習者の「動感発生を促す能力をもった専門の指導者とはいえません」と結論付けている。本研究の事例でいえば、C選手のドリブル有りの非利き腕プレー②直後の指導者とC選手のやり取りの際に、指導者は〈起点構成化能力〉を発揮したと考えられる。つまり、非利き腕プレーに関する知見を有していた指導者はC選手に対するプレーの観察と借問によって、C選手の非利き腕プレー全体の動きの流れを掴めていないという動感志向体験を把握し、それに応じて、全体の動きの流れという動感呈示内容を実演しながら呈示することを“今”開始するべきだと判断したと考えられる。

したがって、指導者は、この時のC選手の動感を観察すると同時にその動感と交信した上で借問を行い、そこで得られた動感素材をもとにC選手にとってどの動感素材が必要なのかを代行し、選ばれた動感素材を処方したと解釈できる。そして、この指導者の一連の営みがハンドボールにおける非利き腕プレーの促発指導の一例であると捉えられる。

第3項 指導者の観察能力による創発阻害の危険性

ここでは、一連の促発指導において指導者の観察能力の優劣によって学習者の動感身体知であるコツとカンの創発が阻害される危険性について考察していく。

促発指導の当初、指導者は非利き腕プレーをしようとするC選手が防御者に正面から接触される現象（写真4⑦-⑩）を観察した。この時、指導者はこの現象の原因をC選手に對峙している防御者の位置や身体の向き等からC選手が「利き腕のシュートを狙っていない

ことが防御者に先読みされているからではないか」と考え、C選手に利き腕のシュートをより狙うことを伝えている。

しかし、実際にC選手が利き腕のシュート（写真3）を数多く現出させていることを考えると、その原因は「利き腕のシュートを狙っていないこと」よりも「利き腕のシュートを狙いながら、相手防御者が利き腕を守りにくるのを先読みするカンが働いていないこと」であると考えられる。

促発指導者に求められる観察能力について、金子（2002, p.518）は『観察能力』とは、運動に有意味な運動感覚の図式を見抜き、その意味構造を読み取る能力である。見る能力とは、解釈能力のことなのである」と述べている。つまり金子の言説から、この時の指導者は、C選手と防御者との間で起こる攻防における意味構造を読み取り、正しく解釈することができておらず、その結果、C選手の動感身体知の創発にとって有益とはいえない言葉がけを行ってしまったものと考えられる。

動感身体知は、私が動くときのコツをつかみ、カンを働かせることができるという働き全体のことを指している（金子, 2005a, p.2）。金子（2005b, pp.29-30）は、このコツとカンの関係について「カンのコツとのあいだに差異化の関係を保ち、そこでは、〈現れ〉と〈隠れ〉の相互隠蔽という差異化現象が立ち現れて」おり、「カン身体知は、自我身体の動きかたを保証する中心化作用をもつコツ身体知に支えられていなければ、ヴァイツゼッカーのいう野次馬の状況判断でしかない」と指摘している。

つまり、「利き腕のシュートを狙いながら、防御者が利き腕を守りにくるのを先読みするカン」を働かせるためには「いつでもストップできるコツ」を掴んでいる必要がある。言い換えれば「いつでもストップできる」からこそ「防御者が利き腕のシュートを守りにくるのを待つこと」ができるのである。したがって、C選手の非利き腕プレーが防御者に守られた（写真4）原因は、C選手が「利き腕のシュートを狙っていないこと」ではなく、「利き腕のシュートを狙いながら、防御者が利き腕を守りにくるのを先読みするカン」を働かせるための下支えとなる「いつでもストップできるコツ」を掴んでいないことだと考察できる。

それにも関わらず、この時の指導者の観察能力ではC選手と防御者との間で起こる攻防における意味構造を読み取り、正しく解釈することができなかった。そのため、非利き腕プレーが防御者に守られた（写真4）原因を、C選手が「利き腕のシュートを狙っていないことが防御者に先読みされているからではないか」と解釈してしまい、C選手に利き腕のシュートをより狙うことを伝えている。その結果、C選手は迷いながらのプレー（写真5）を現出させ、非利き腕プレーを成功させることができなかった。

したがって、上記の論述から実際の指導現場では指導者がその観察能力をうまく発揮できないことによって、学習者の動感身体知の創発を阻害してしまう危険性があると考えられる。このことは「運動伝承の不首尾は、まったく一方的に、受け手としての弟子や選手や生徒の努力不足、ないしは、能力不足に起因させてはばからない」（金子，2002，p.

358) 指導に一考の余地があることを示唆している。

第4項 非利き腕プレーに関する個人戦術力の変容過程

ここでは、一連の促発指導におけるC選手の非利き腕プレーに関する個人戦術力の変容過程について考察していく。

促発指導の当初、C選手は防御者がいない状況では何の苦も無く切り返しの動きから非利き腕でシュートを打つことができていた。しかし、防御者がいるズレた1対1（図3）の状況においてC選手は防御者が非利き腕側に位置しているにも関わらず、非利き腕側へ切り返しの動きを行い防御者に正面から接触され非利き腕プレーを成功させることができなかった（写真4）。

個人戦術力は、ゲーム状況を合目的的に解決するために個々の選手が行う具体的・実践的な行為の達成力であり、ゲーム状況の分析やプレーの選択等といった認知に関わる戦術的思考力と動作の遂行に関わる技術力に規定されている（會田，2012b，15-16）。つまり、防御者がいない状況では切り返しの動きから非利き腕でシュートを打つことができていたC選手が、防御者がいるズレた1対1の状況では非利き腕プレーを成功させることができなかった事実から、この時のC選手は個人戦術力における技術力に関してはある程度有していたが戦術的思考力に関しては必要十分ではなかったと考えられる。

また、ボールゲームにおけるフェイントは「相手プレーヤーをあざむき、誤った行為に

誘うきっかけにするのと同時に、実際の行為の意図を知らせないでおく」戦術行為であり陽動（見せかけ）行為とそれに続く後続行為から構成され、この2つの行為はまとまりをもっているとされている（G.シュテラーら、1993、p.375）。しかしながら、この時のC選手の行為（写真4）は、相手防御者に非利き腕プレー（実際の行為）の意図を読み取られ対応されたものであると考えられる。このことは、會田（2012b、101）が指摘しているように「フェイントをフェイクとそれに引き続く主動作が作り出す、まとまりのある行為ととらえてしまうと、相手に自らの動きの意図を早い時機に読みとられ、適切に対応される」ことの実態である。

つまり、この段階のC選手には「防御者がいない状況では切り返しの動きから非利き腕でシュートを打つ」行為の技術力は有していたが戦術的思考力を十分に有していなかったために、この行為自体を一つのまとまりのある行為として実行してしまい、防御者にその行為の意図を読まれ対応されてしまったものであると考えられる。

次に、練習を進めていく中でC選手は迷いながらのプレー（写真5）を現出させた。このプレーの直後にC選手が語った「あの勢いでいったら来てくれると思ったんですけど…思ったより来てくれなくて…」という言葉から、この段階のC選手には防御者を誤った行為に誘おうとする意図が少なからずあったと捉えられるが、それでもまだ状況の意味構造を十分に読み取れるだけの戦術的思考力を身につけていなかったため、非利き腕プレーの技術力を合目的的に発揮することができなかったと考えられる。

その後、C選手は指導者から「常に前を見て状況を把握できるようにしよう」という言葉がけを受け、ズレた1対1において初めて非利き腕プレーを成功させた（写真6）。このことは、指導者からの「常に前を見て状況を把握できるようにしよう」という言葉がけによって、C選手が防御者の位置や身体の向き等の状況を観察・分析し、合目的的なプレーの選択に至ったものと考えられる。つまり、指導者の言葉がけはC選手の戦術的思考力を向上させるきっかけの一つになったと考えられる。

しかし一方で、會田（2012b, 123）が指摘しているように「戦術的思考力の養成は、〈中略〉『対峙する相手選手の行為に適切に対応するリアクションの行為を可能にする動作を習熟させた上で』という条件を設定すること」を踏まえると、ただ単にゲーム状況の観察・分析をさせただけではゲーム状況を合目的に解決できるとは考えづらく、防御者がいない状況で切り返しの動きから非利き腕でシュートを打つこと（リアクションの行為）ができるという前提が必要不可欠であると考えられる。

最後に、C選手はより試合に近い状況で非利き腕プレーを成功させたこと（写真9）について、このプレーの直後にC選手が語った「秦（隣のポジションの味方）が（防御者を）寄せてくれて、大智（防御者）がセンター（隣のポジションの味方）を見とったんで、自分がアウト攻める意識を見せようと」や「大智（防御者）が秦（隣のポジションの味方）のそこ見とって、もらう寸前に（防御者が）ダッシュで来たんで」という言葉から、この段階のC選手はそれまでと比べゲーム状況をより具体的に観察・分析できており

防御者を誤った行為に誘うための行為を志向し、それに対応しようとする防御者の志向を読み取っていたことが覗える。つまり、C選手のより試合に近い状況での非利き腕プレーの成功は、C選手が防御者の位置や視線を観察しながらその意味構造を読み取った上で自身の攻撃行為を志向し、それに対応しようとする防御者の防御行為にC選手が対応して生まれたものであると考えられる。

したがって、以上の論述から一連の促発指導におけるC選手の非利き腕プレーに関する個人戦術力の変容過程は、まず「防御者がいない状況では切り返しの動きから非利き腕でシュートを打つ」行為の技術力は有しているが戦術的思考力を十分に有していない段階から始まり、次に、防御者の位置や身体の向き等の状況を観察・分析しながら合目的なプレーの選択ができる段階を経て、最後に、防御者の位置や視線を観察しながらその意味構造を読み取った上で自身の攻撃行為を志向し、それに対応しようとする防御者の防御行為に対応できる段階になることが考察された。

第5節 まとめ

研究Ⅱでは、はじめに対象とする非利き腕プレーを特定し促発指導について論述した。そして、対象者の内在体験であるキネステーゼを捉える手法としての現象学的反省分析について論述した。その上で、育成年代のハンドボール選手における非利き腕プレーに関するコツ身体知とカン身体知の統一体であるキネステーゼの発生様態とその個人戦術力の変

容を明らかにすることを目的とし、男子中学生ハンドボール選手1名を対象に促発指導を実施した。その結果、以下の4点が明らかになった。

1) 育成年代のハンドボール選手における非利き腕プレーに関するキネステーゼの発生様態を概観すると、そこにはキネステーゼの形成位相が浮かび上がり、原志向位相、探索位相、偶発位相、形態化位相の過程を経ていた。

2) ハンドボールにおける非利き腕プレーの促発指導では、指導者は学習者の動感を観察すると同時にその動感と交信した上で借問を行い、そこで得られた動感素材をもとに学習者にとってどの動感素材が必要なのかを代行し、選ばれた動感素材を処方していた。

3) 実際の指導現場では、指導者がその観察能力をうまく発揮できないことによって学習者の動感身体知の創発を阻害してしまう危険性があると考えられ、このことは、運動伝承がうまくいかない時の原因には指導者の能力不足が挙げられる場合があることを示唆している。

4) 育成年代のハンドボール選手における非利き腕プレーに関する個人戦術力は、非利き腕プレーの技術力は有しているが、その戦術的思考力は十分に有していない段階から始まり、周囲の状況を観察・分析しながら合目的なプレーの選択ができる段階を経て、最後に、防御者の位置や視線を観察しながらその意味構造を読み取った上で自身の攻撃行為を志向し、それに対応しようとする防御者の防御行為に対応できる段階になることが考察された。

第 4 章 終章

第 1 節 結論

第 1 項 非利き腕プレーの固有の知およびキネステーゼ

本研究では、国内におけるスポーツ科学分野での側性に関する研究が少ないことを背景に挙げる一方で、ゴール型球技におけるゲーム状況の合目的的な解決に有効であると考えられる非利き側の技術の習熟に関する知見が日本のハンドボール界において不足していることを問題視した。そこで、現象学的手法を用いた調査研究と事例研究を通してハンドボールにおける非利き腕プレーの本質とその技術習熟に寄与する知見の抽出を試みた。

研究Ⅰの国内トップ選手を対象とした調査研究では、非利き腕プレーにおけるコツ身体知とカン身体知が抽出され、非利き腕プレーの固有の知である「利き腕での攻撃戦術意図を対峙する防御者に先取りさせる知」が明らかになった。ここで明らかになった「利き腕での攻撃戦術意図を対峙する防御者に先取りさせる知」は利き腕のシュートを狙いながら防御者が利き腕のシュートを守りにくるのを先読みする等といった自らの動作に関するコツ身体知と防御者を含めた状況に関するカン身体知が絡み合っていると考えられる。加えて、コツとカンは相互隠蔽原理の関係で構成されており（金子，2005b，pp. 29-30），一方を志向すると他方が隠れるコインの表裏のような関係にある（會田，2012b，21）。

続く、研究Ⅱの男子中学生を対象とした事例研究では、非利き腕プレーの習得を目指し

て促発指導が行われた。その結果、対象者はキネステーゼの形成位相における4つの位相を経て、非利き腕プレーを創発させた。

しかしながら、形成位相が変わっていく過程において対象者には「そう動きたいと思ってもやり方がわからない」現象や「できたけど、なぜできたのかはわからない」現象が発生し、ハンドボールにおける非利き腕プレーに関するキネステーゼは学習者がその習熟過程の中で紆余曲折を経て発生していると考えられる。

第2項 促発指導者の寄り添いと共感の重要性

本研究では、研究Ⅰにおいてハンドボールにおける非利き腕プレーに関する知見を把握し、研究Ⅱにおいて研究Ⅰでの知見を有している指導者の学習者への非利き腕プレーの促発指導の過程を観察した。研究Ⅰにおいて、指導者は学習者が「なじみの地平」を構成していることを確認したうえで促発指導を開始している。このことは、現場の指導者は「承け手に『なじみの地平』が生じないのであれば、〈伝える-覚える〉という関係系は成立するはずもない」（金子，2002，p.409）ことを知悉する必要があることを示唆している。

次に、ハンドボールにおける非利き腕プレーの固有の知である「利き腕での攻撃戦術意図を対峙する防御者に先取りさせる知」は「利き腕でシュートを打つことができる」状態で「ストップすることができる」等のコツ身体知と「防御者の意識（視線）を感じ」つつ

「防御者が利き腕を守りにくるのを待つ」等のカン身体知が複雑に絡み合って洗練された動感身体知であるため、習熟段階が初期の学習者にとっては非常に困難な内容である。そのため、指導者にはその時の学習者の習熟段階を見極めるための観察能力が求められ、観察能力が未熟な指導者は学習者の動感身体知の創発を阻害してしまう危険性があると考えられる。

一方で、観察能力に優れた指導者は動感創発に苦悩している学習者の動感に寄り添いながらお互いの動感を共有すること〈動感出会い〉を通じて、学習者が求めている〈目当て道しるべ〉を提供できることが明らかとなった。加えて、マイネル（1960, p.129）が「運動共感とは以前の自分の運動の全財産が動き出す」と述べているように、指導者は自らが選手だった頃に自身のプレーが思い通りにできなかった経験を想起し、学習者のできない現象を理解し困惑していることに対して共感していると考えられる。そのことによって、指導者は自身が教えたタイミングで促発指導を開始するのではなく、学習者の立場になって学習者にとって最適な促発指導のタイミングを判断する起点構成化能力を発揮することが示唆された。

第3項 非利き腕プレーの養成と課題

本研究では、ハンドボールにおける非利き腕プレーがゲーム状況を合目的的に解決するために有効である個人戦術力として取り上げ、その習熟に寄与する知見の獲得と習熟過程

の変容を観察した。

サッカー（日本サッカー協会，2020，p.54）やバスケットボール（バスケットボール協会，2002，pp.66-86）といった他のゴール型球技と比べ，非利き腕の技術習得が立ち遅れているハンドボール（日本ハンドボール協会，1992）の現状は，まさに「新しい個人戦術の習得が，その後の選手養成の課題になる」（會田，2012b，3）ことを示唆しており，育成年代における非利き腕プレーの養成には一考の余地があると考えられる。

また，利き手と非利き手の投球練習が投球技能の習熟に及ぼす影響を調査した研究（T.Stöckel & M.Weigelt，2012）によると，投球の正確さの課題において非利き手で練習した後，利き手に持ち替えて練習する方が，逆の順序で練習するのに比べてより多くの練習効果を得ることができると結論づけており，フェッツ（1979）は「種々の実験から，〈中略〉優勢でない側の練習によって，優勢な側は，優勢な側の練習における優勢でない側よりも得るものが大きい」と述べている。つまり，先行研究の結果や文献から非利き腕の練習は利き腕にも良い影響を与える可能性があると考えられ，金子はこの現象を〈優勢化能力〉という言葉で説明している（金子，2005b，p.68）。したがって，これらの論述は非利き腕の練習を支持するものであると考えられる。

しかし一方で，本研究では，研究Ⅱにおいて特定の非利き腕プレーを，右利きライトバックのポジションである，全国大会出場レベルの男子中学3年生1名を対象とした事例のみを取り上げている。そのため，どのような非利き腕プレーを，どの年代の，どのポジシ

ヨンの選手に習得させることが目標となるのかまでは検討するに至ってはいない。先行文献において、片側だけの練習をしている人はポジションに特有の戦術的要求が達成しづらいことがあること（デーブラー,H, 1985, p.282）、両利きはポジション独自の課題を解決する際に大きな効果を上げること（G.シュテラーら, 1993, p.37）が報告されている。このことを踏まえると、今後は各ポジションに求められる戦術課題を整理し、複数の事例を対象に、ポジション特性に基づいて非利き腕プレーに関する知見について検討し、その共通点や相違点について明らかにすることで、実践現場に役立つ知見の提供が可能になると考えられる。

参考文献

- 1) 會田宏 (1992) ボールゲームにおける技術の特性および技術トレーニングのあり方:
球技運動学的視点からの一考察. スポーツ運動学研究, 5: 17-25.
- 2) 會田宏 (2006) 個人戦術. (社) 日本体育学会監修 最新スポーツ科学事典. 平凡
社: 東京, p.179.
- 3) 會田宏 (2008) ハンドボールのシュート局面における個人戦術の実践知に関する質
的研究: 国際レベルで活躍したゴールキーパーとシューターの語りを手がかりに. 体
育学研究, 53: 61-74. 64-65. 68-69. 65. 70.
- 4) 會田宏 (2012a) 球技における個人戦術に関する実践知の理解の仕方. スポーツ運動
学研究, 25: 17-28. 20. 21. 22.
- 5) 會田宏 (2012b) 球技の個人戦術における実践知の構造に関する研究ーハンドボ
ールの事例を中心にしてー. 平成23年度筑波大学大学院博士論文, 3. 15-16. 19.
21. 22. 38. 101. 123.
- 6) 浅見高明・多田繁・岡田修一 (1981) スポーツ選手の一側優位性 (左右差) の比較
検討. 筑波大学体育科学系紀要, 4: 99-109.
- 7) 浅見高明 (1982) 大学スポーツ選手の利き側の特徴について. バイオメカニズム,
6: 129-136. 129.

- 8) Bert C. L. Touwen. (1972) *Laterality and Dominance*.
Developmental Medicine and Child Neurology, 14 : 747-755.
- 9) デブラー, H. : 谷釜了正 訳 (1985) 球技運動学. 不昧堂出版 : 東京, p.282.
- 10) F. フェッツ : 金子明友・朝岡正雄 訳 (1979) フェッツ体育運動学. 不昧堂出版 :
東京, p.233.
- 11) 藤本元・中村剛 (2016) ボールゲームにおける監督の状況把握能力に関する研究－
ハンドボール競技を例証として－. スポーツ運動学研究, 29 : 45-61.
- 12) G. シュテラー・L. コンツァック・H. デブラー : 唐木國彦 監訳 (1993) ボールゲ
ーム指導事典. 大修館書店 : 東京, p.37. p.375.
- 13) 浜田寿美男 (2007) 虚偽自白の心理学とその射程. 認知心理学研究, 4 : 133-
139.
- 14) Hinsie, L. E. Campbell, R. J. (1970) *Psychiatric Dictionary* (4th e
d). Oxford University Press.
- 15) 広瀬寛子 (1992) 看護研究における現象学的アプローチの適用に関する考察－看護
面接過程の現象学的分析方法作成までのプロセスに焦点を当てて－. 日本看護科学会
誌, 12 : 45-57.
- 16) フッサール : 浜渦辰二 訳 (2001) デカルト的省察. 岩波書店 : 東京, pp.69-
76.

- 17)市村さやか・中村剛（2018）マット運動に苦手意識を持つ児童の授業参加過程に関する事例研究－小学校高学年の授業実践を通して－. スポーツ運動学研究, 31: 53-63. 56.
- 18)伊田行秀（1986）潜在的利き手と利き脳. 心理学研究, 56（6）: 349-352.
- 19)井上和徳・佐藤佑（2003）サッカープレイヤーの非利き足のトレーニングに関する実践的研究：中学1年生のキックについて. 仙台大学大学院スポーツ科学研究科研究論文集, 3(1): 41-48.
- 20)岩内章太郎（2016）現象学的還元とは何か. Waseda Global Forum, 13: 53-76. 56.
- 21)JFAカリキュラム検討プロジェクト（2020）JFAサッカー指導教本2020. 公益財団法人日本サッカー協会. p.54.
- 22)Jürgen Hänggi, Nicolas Langer, Kai Lutz, Karin Birrer, Susan Mérillat, Lutz Jäncke. (2015) Structural Brain Correlates Associated with Professional Handball Playing. PLoS ONE, 10(4): e0124222.
- 23)亀口憲治（1975）ラテラリティーその発達と障害－. 教育心理学研究, 23（4）: 242-249.
- 24)金子明友（1985）運動技術の今日的問題性. 体育科教育, 33（11）: 20-22.

- 25)金子明友(1990)運動学講義. 大修館書店:東京, p.257.
- 26)金子明友(2002)わざの伝承. 明和出版:東京, p.220. p.247. pp.253-254. p.358. p.409. pp.418-430. p.419. p.518.
- 27)金子明友(2005a)身体知の形成(上). 明和出版:東京, p.2. p.25. p.65. p.66. p.68. p.83. p.177. p.327. p.359.
- 28)金子明友(2005b)身体知の形成(下). 明和出版:東京, p.25. pp.25-26. pp.29-30. p.30. p.36. p.41. pp.48-50. p.49. p.69. pp.119-121. p.126. p.143. p.159. p.161. p.163. p.164. p.193. p.199. p.202. p.222. pp.245-246.
- 29)金子明友(2007)身体知の構造—構造分析論講義—. 明和出版:東京, p.269.
- 30)川野健治(2007) はじめての質的研究法—臨床・社会編. 東京図書:東京, p.61.
- 31)ケルン, J:朝岡正雄ほか 監訳(1998)スポーツの戦術入門. 大修館書店:東京, pp.39-40.
- 32)菊地邦雄・万井正人・伊藤一生(1966)利き手利き足の定義について. 体育学研究, 10(2):224.
- 33)古東哲明(2005)他界からのまなざし—臨生の思想. 講談社:東京, p.132.

- 34) 松田雅弘・渡邊修・来間弘展・村上仁之・渡邊壘・妹尾淳史・米本恭三（2011）非利き手による箸操作の運動時，イメージ時，模倣時の脳内機構の比較－機能的MRIの検討－．理学療法科学，26（1）：117-122．
- 35) 松元剛・松尾博一・青山彰吾（2015）ゴール型ボールゲームにおける戦術的知識とパフォーマンスについて．コーチング学研究，29（1）：1-11．
- 36) M.C.コーバリス・I.L.ビール：白井恒常ほか 訳（1978）左と右の心理学．紀伊國屋書店：東京，p.200．
- 37) 道上静香・阿江通良（1998）世界一流女子テニスプレーヤーのフォアハンド・ストロークのキネマティクスの分析－クローズドスタンスとオープンスタンスの比較－．バイオメカニクス研究，2：242-251．
- 38) M.メルロー＝・ポンティ：竹内芳郎・小木貞孝 訳（1967）知覚の現象学Ⅰ．みすず書房：東京，p.89．
- 39) 無藤 隆 編（2004）質的心理学 創造的に活用するコツ．新曜社：東京，pp.2-7．
- 40) 中川 昭（1991）ボールゲームにおける状況判断能力と状況認知能力の関係．スポーツ運動学研究，4：23-32．
- 41) 中村剛（2007）体育授業における促発指導の不可欠性について－発生運動学の立場から－．埼玉大学紀要 教育学部，56（1）：245-259．249．

- 42)中村剛（2013）運動指導における超越論的反省分析の重要性．スポーツ運動学研究，26：13-27．14．
- 43)中村剛（2015）マット運動における倒立の動感発生に関する様相化分析．スポーツ運動学研究，28：1-18．3．
- 44)中村有里・松見淳子（2009）行動的コーチングによるハンドボールのシュートフォームの改善．行動分析学研究，24（1）：54-58．
- 45)Nicholls, A., Holt, N. L., and Pollman, R. (2005)
A phenomenological analysis of coping effectiveness in golf.
The Sport Psychologist, 19：111-130．
- 46)日本バスケットボール協会 編（2002）バスケットボール指導教本．大修館書店：東京，pp. 66-86．
- 47)日本ハンドボール協会 編（1992）ハンドボール指導教本．大修館書店：東京．
- 48)岡端隆（2018）車いすテニスの動感世界．日本スポーツ運動学会大会，31：3-4．
- 49)鬼澤陽子・高橋健夫・岡出美則・吉永武史（2004）バスケットボールの攻撃の映像を用いた戦術的状況判断テスト作成の試み．体育科教育学研究，20（2）：1-11．
- 50)小野剛（1998）世界に通用するプレーヤー育成のためのクリエイティブサッカー・コーチング．大修館書店：東京，p.19．

- 51)パトリシア・ベナー：早野真佐子 訳（2004）エキスパートナースとの対話－ベナー看護論・ナラティブス・看護倫理．照林社：東京，p.158．
- 52)西條剛央（2007）ライブ講義・質的研究とは何か SCQRM ベーシック編．新曜社：東京，p.10．
- 53)佐藤徹（2009）運動指導におけるキネステーゼ理解の構造－志向分析能力の形成に関する現象学的考察－．平成21年度筑波大学大学院博士論文，57．
- 54)柴田俊和（2015）運動指導と身体知．びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要，3：9-17．15．
- 55)品川嘉也・菊池美也子（1986）大脳半球機能．日本医科大学雑誌，53：209-211．
- 56)谷徹（2002）これが現象学だ．講談社：東京，p.142．
- 57) Tino Stöckel. and Matthias Weigelt. (2012) Brain lateralisation and motor learning: Selective effects of dominant and non-dominant hand practice on the early acquisition of throwing skills. Laterality Asymmetries of Body, Brain and Cognition, 17 : 18-37.
- 58)Touwen, B, C. L. (1972) Laterality and Dominance. Developmental Medicine and Child Neurology, 14 : 747-755.

- 59)内山治樹・大神訓章・小野秀二（1996）バスケットボールにおける非利き手ドリブルシュートの習熟過程の分析－運動形態の発達とラテラルティ現象との関連に注目して－. コーチング学研究, 9（1）: 25-37.
- 60)ウヴェ・フリック：小田博志ほか 訳（2011）新版 質的研究入門－〈人間の科学〉のための方法論. 春秋社：東京.
- 61)和田 尚・阿江通良・遠藤俊郎・田中幹保（2003） バレーボールのスパイク動作における体幹のひねりに関するバイオメカニクス的研究. バレーボール研究, 5：1-5.
- 62)Wagner H, Buchecker M, von Duvillard S and Müller E（2010） Kinematic description of elite vs low level players in team-handball jump throw. J Sports Sci Med, 9（1）: 15-23.

図表

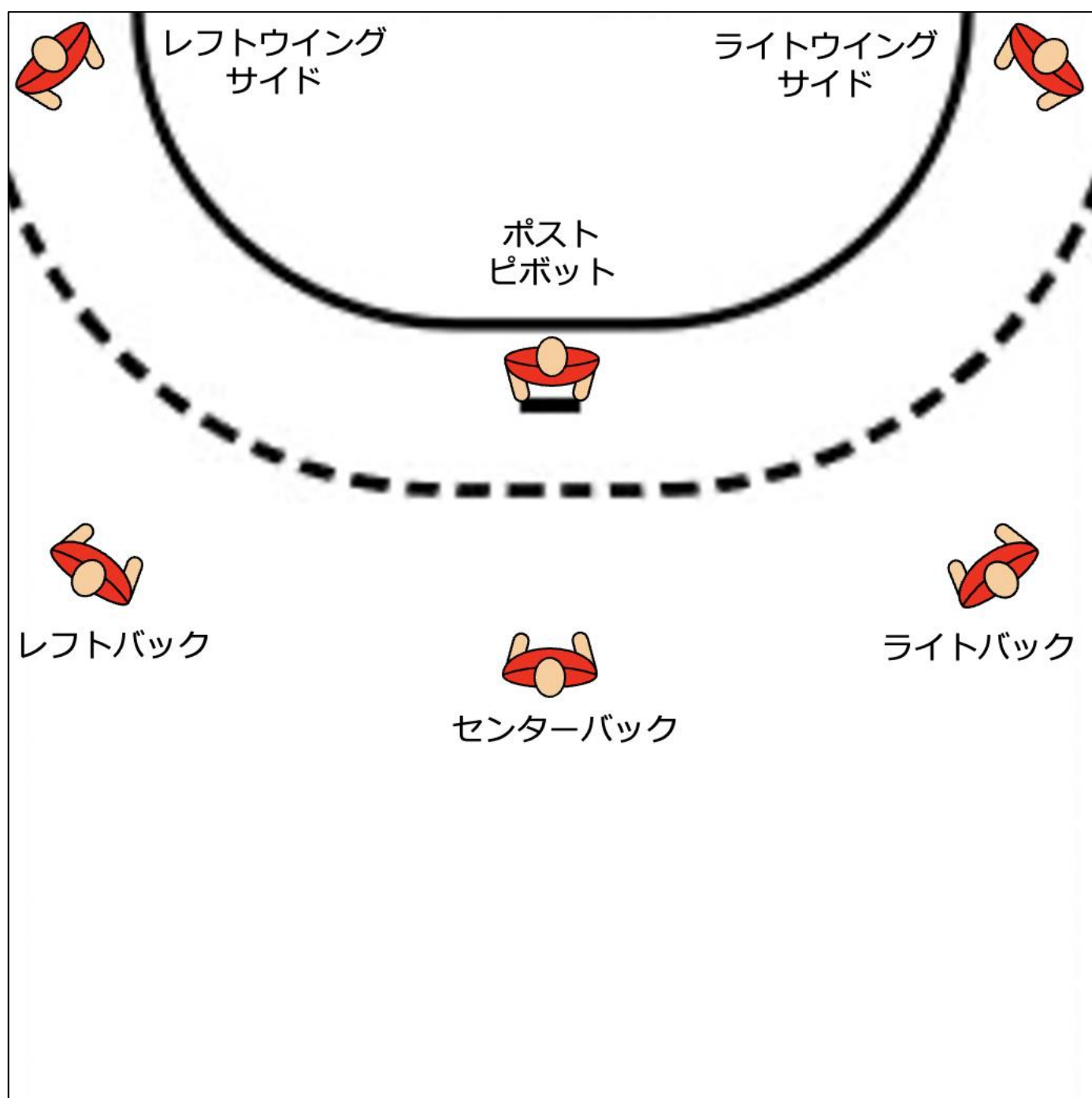


図1 ハンドボールにおけるオフENSEのポジション名

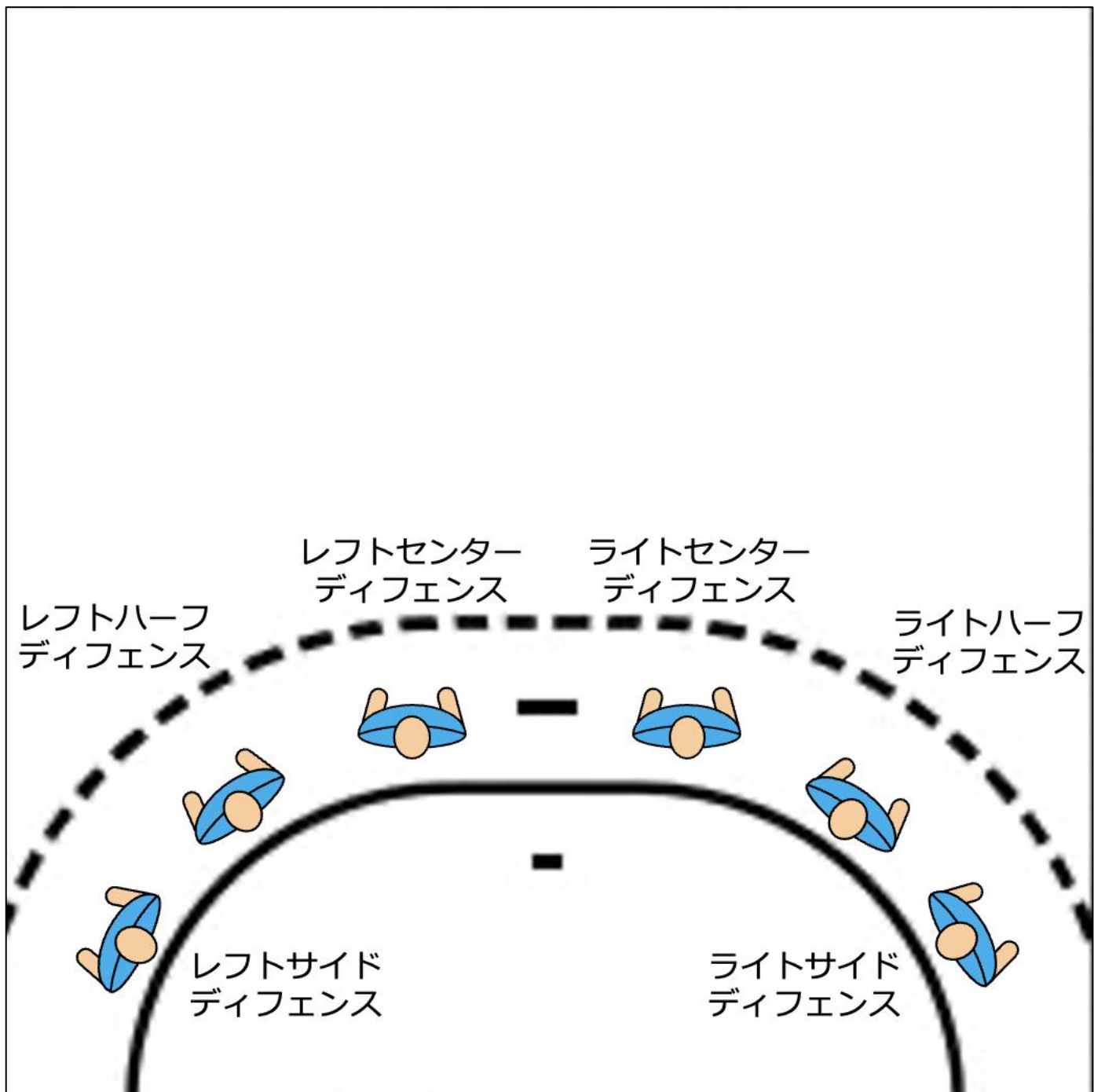


図2 ハンドボールにおけるディフェンスのポジション名

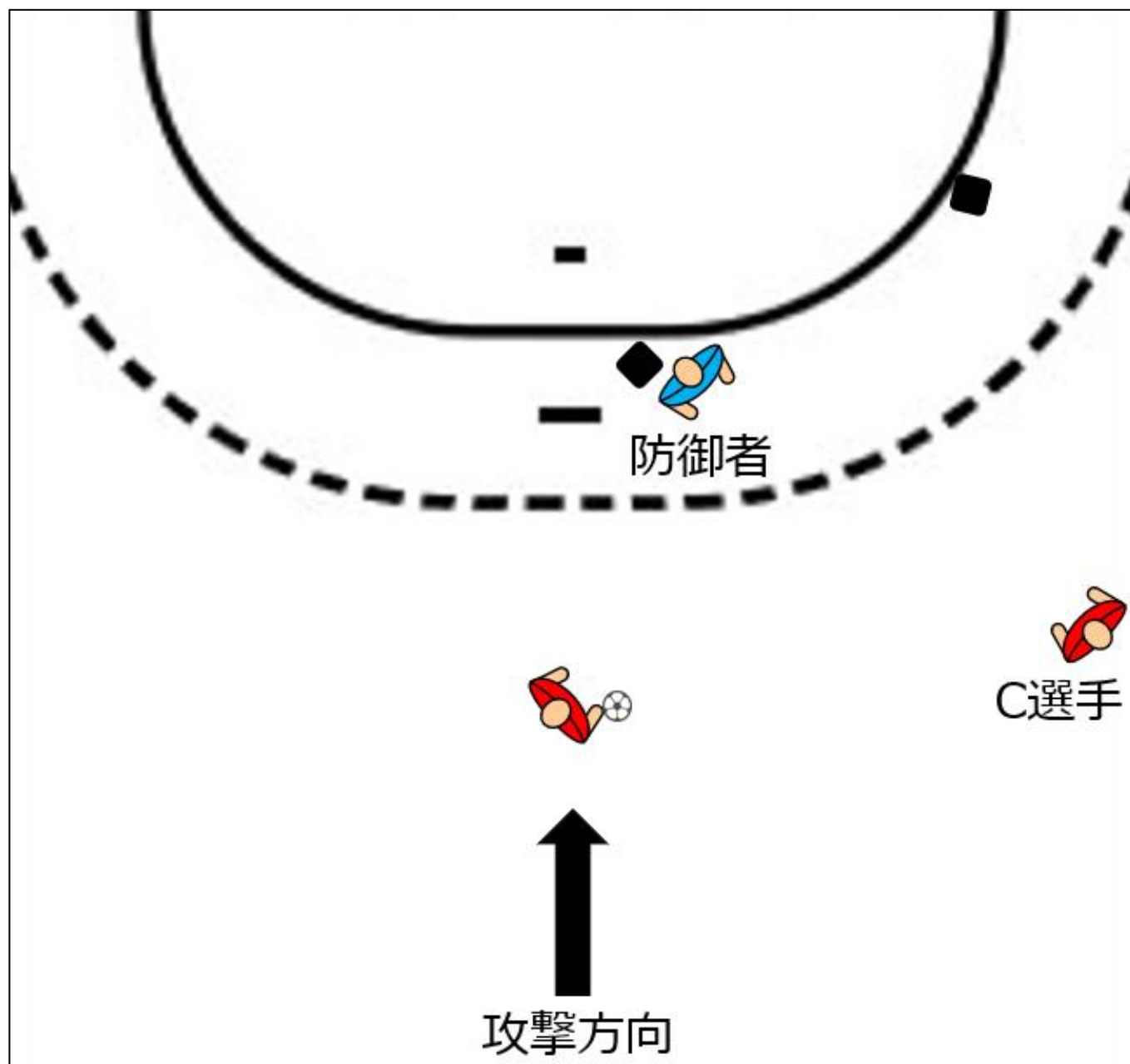


図3 ズレた1対1

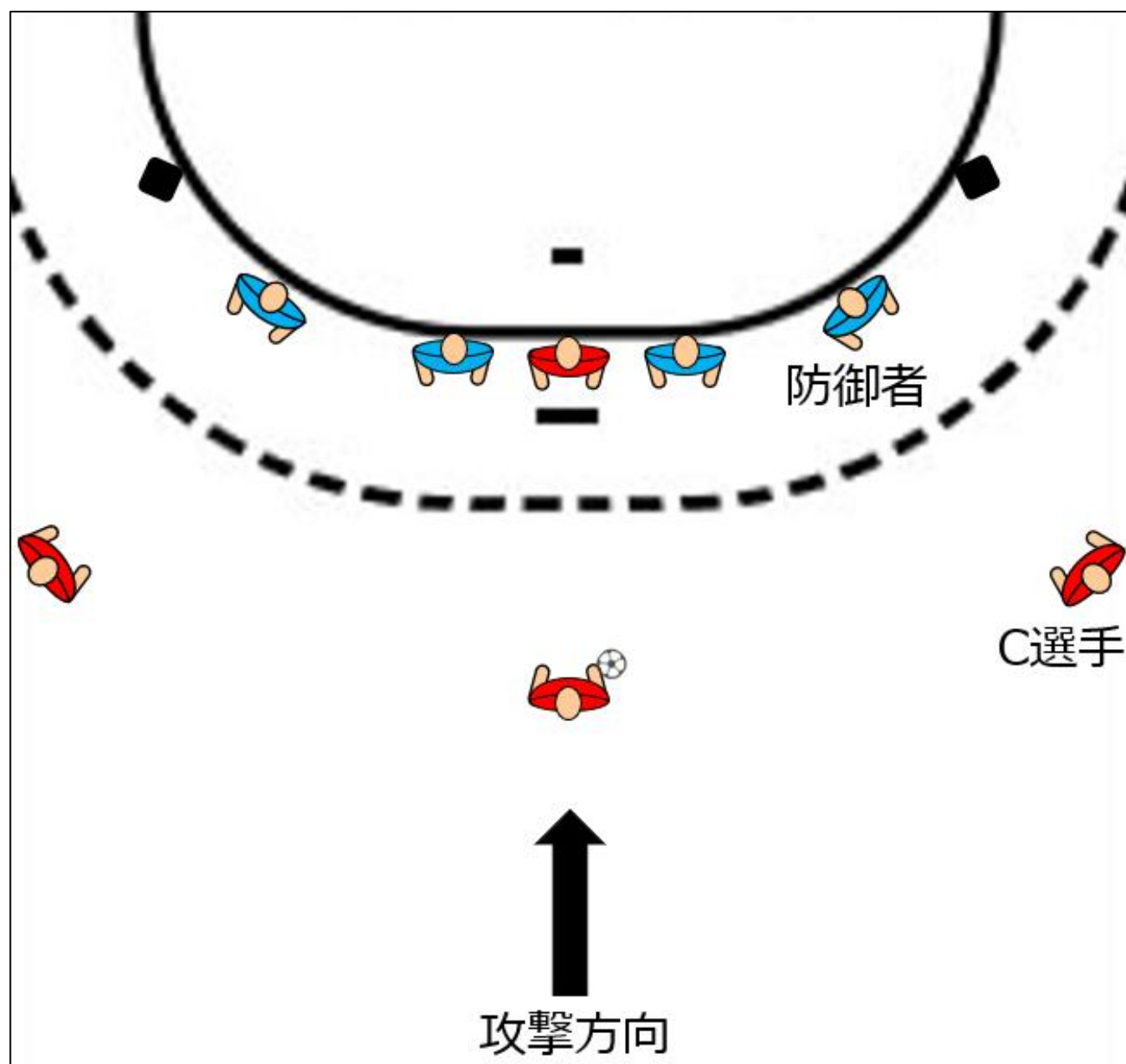


図4 フリーの4対4

インタビュー調査協力承諾書

1. 調査の概要

この調査は、ハンドボールにおける非利き腕のプレーに関する実践知の構造とその指導法に関する研究（研究代表者：吉本遼）の一貫として行われるものです。

2. 調査の目的

この調査は、ハンドボールの非利き腕のプレーにおける高い技術力を持っている方々に、これまでに獲得されたコツや動き方の意識についてお聞きし、今後のジュニア期の指導に役立てることが目的です。

3. 調査協力について

この調査への参加は協力者の自由意志によるものであり、調査への参加を随時、拒否・撤回できます。また、拒否・撤回によって協力者が不利な扱いを受けることはありません。

4. データの管理

収集したデータと個人情報の管理には十分な注意を払い、学術的な研究以外の目的には用いません。

5. 調査結果の公開

調査によって得られたデータは、研究発表や学術論文に使用されたり、ウェブ上で公開されたりすることがあります。調査結果を公開する場合は、協力者のプライバシーに十分配慮し、協力者が特定されないようにします。なお、調査結果の公開は、収集された音声文字化したものに限り、収集された音声そのものは公開しません。

6. 調査実施責任者

大阪体育大学大学院スポーツ研究科博士前期課程 曾根純也研究室 吉本遼
大阪府泉南郡熊取町朝代台 1-1
電話番号：090-5900-0522 e-mail：221m20@ouhs.ac.jp

私は、上記の内容を理解した上で、自らの意志にもとづいて、調査への協力およびデータの取り扱いについて承諾します。

承諾年月日： 年 月 日

研究協力者署名： _____

住所： _____ 電話番号： _____

代諾者署名： _____（研究協力者が未成年等の場合）研究協力者との続柄（ ）

住所： _____ 電話番号： _____

説明者署名： _____

研究代表者署名： _____

ハンドボールにおける非利き腕のプレーのコツ・動き方の意識に関する調査

ハンドボールにおける非利き腕のプレーに関する実践知の構造とその指導法に関する研究

研究代表者 吉本 遼（大阪体育大学大学院）

スポーツを指導する場合には、運動に関する客観的な情報だけでなく、「どのようにするとできるのか」、「どのような感じで動くか」といった主観的な情報を伝えることが効果的です。このことは、高度な能力を有する成人競技者より、むしろジュニア期の競技者にとって重要です。しかし、選手や指導者の持つ主観的構想(コツ、動き方の意識、イメージ)に関する調査研究は、必要性が指摘されているにもかかわらず、ほとんどありません。また、ゴール型球技の技術指導においては利き側・非利き側に関わらず両側とも同じように動かすことが理想とされています（例えば、サッカーのドリブルやパス、バスケットボールのレイアップシュートやドリブル等）。そこで、ハンドボールの非利き腕のプレーにおける高い技術力を持っている方々に、これまでに獲得されたコツや動き方の意識についてお聞きし、今後のジュニア期の指導に役立てようというのが本調査の趣旨です。

質問項目の中には、過去にさかのぼって、イメージを思い出していただくものが含まれています。記憶違いを心配されたり、面倒臭く思われたりするかもしれませんが、ご協力のほどどうぞよろしくお願い申し上げます。なお、生育史などに関わる質問で、答えたくないと思われた質問にはお答えいただくなくても結構です。その場合には質問番号に×印をつけてください。

回答年月日： 年 月 日

ふりがな：()

氏 名：() 性別：(男 ・ 女 ・ その他)

年齢：(満) 歳

連絡先 電話番号 (- -) e-mail：()

1. あなたのベスト3の競技成績を挙げてください。

	大会名	年	成績や記録	年齢
ベスト1				
ベスト2				
ベスト3				

2. 競技生活全般について

(1) 身長伸びが最も大きかったのは何歳くらいでしたか () 歳頃

(2) 身長伸びが止まったのは何歳くらいでしたか () 歳頃

(3) 最もきつい練習をしたのは何歳くらいでしたか () 歳頃

どんな練習でしたか ()

(4) ハンドボールが最も楽しかったのは何歳くらいでしたか () 歳頃

楽しかった理由は ()

(5) ハンドボールをするのが最も苦しかったのは何歳くらいでしたか () 歳頃

苦しかった理由は ()

3. あなたの取り組んできたスポーツ種目を年齢区分ごとに記入してください。

なお、大分類には、ハンドボール、陸上競技のようにスポーツ種目を、小分類には、大分類の専門種目、ポジション、階級などを記入してください。特にスポーツ活動を行っていなかった時期については、×印を記入してください。

	～12歳	12～15歳	15～18歳	18～22歳	23歳以上
スポーツ種目①					
大分類					
小分類					
スポーツ種目②					
大分類					
小分類					

4. あなたは主に、どこでスポーツ活動を行っていましたか。主なスポーツ活動の場を下記から選んで、その番号を年齢区分ごとに記入してください。

	～12歳	12～15歳	15～18歳	18～22歳	23歳以上
活動の場					

スポーツ活動の場

1. 家庭 2. 地域のスポーツ少年団 3. 学校(大学を含む)の運動部
4. 出身校の運動部 5. 公共組織(体育館、公民館など)のスポーツクラブ
6. 民間のスポーツクラブ 7. 勤務先の運動部・スポーツクラブ
8. その他の運動部・スポーツクラブ 9. その他 ()

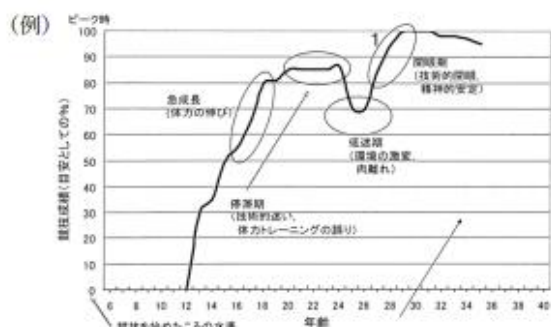
5. あなたのスポーツ活動の指導者についてお聞きます。指導者の有無を年齢区分ごとにお答えください(有・無のどちらかに○)。また、指導者がいた場合には、その社会的立場を下記から選んで、その番号を年齢区分ごとに記入してください。

	～12歳	12～15歳	15～18歳	18～22歳	23歳以上
指導者の有無	(有・無)	(有・無)	(有・無)	(有・無)	(有・無)
指導者の社会的立場					

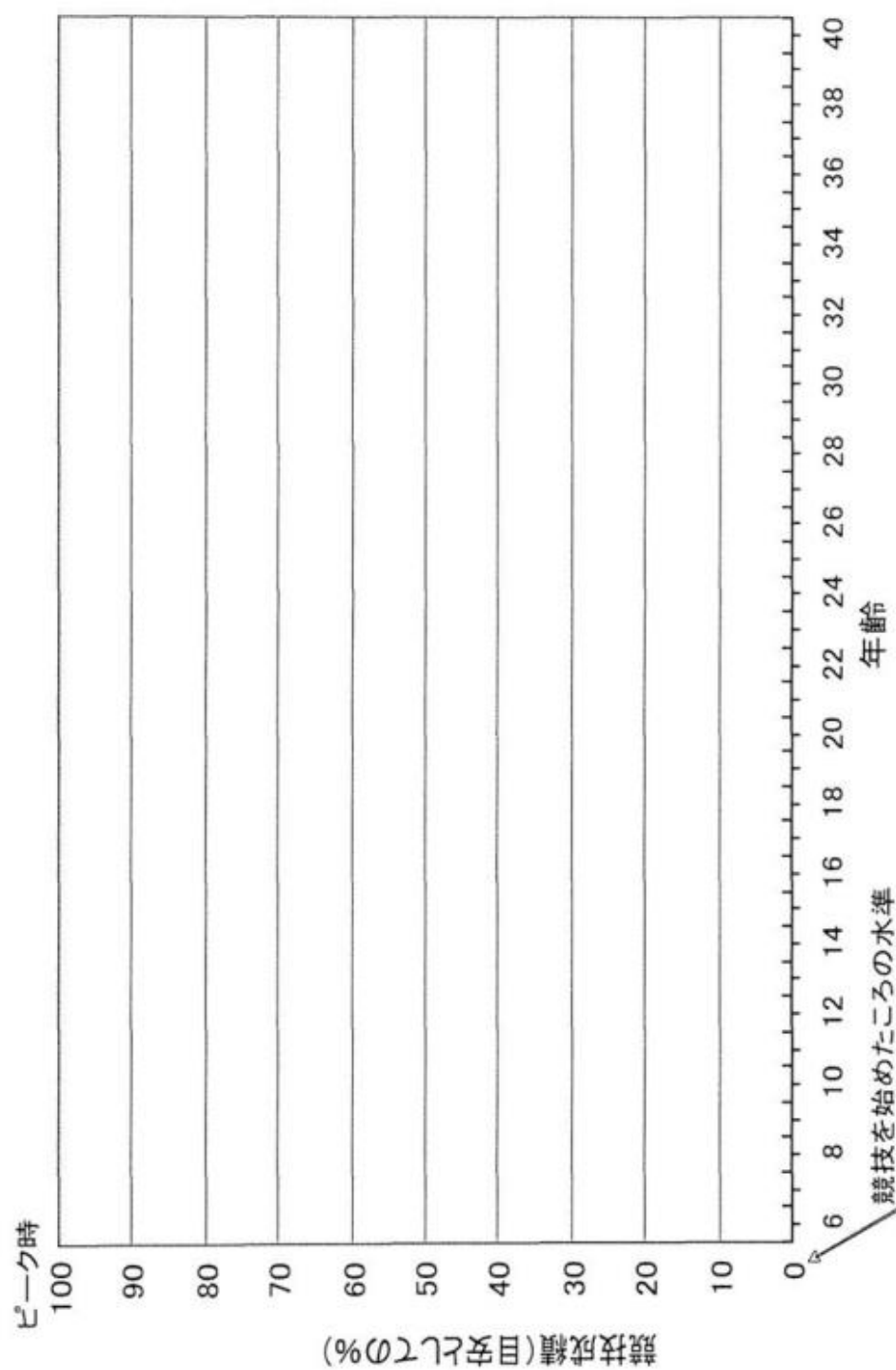
指導者の社会的立場

1. 家族 2. 地域の社会体育指導者 3. 自分の学校(大学を含む)の教員
4. 運動部・スポーツクラブのOB・OG 5. 運動部・スポーツクラブの専任指導者
6. 不明 7. その他 ()

6. あなたの現役時代の競技力やパフォーマンスの変化はどのようなものでしたか。ハンドボールを始めたころの水準0%、競技成績がピークのころを100%として相対的に自己評価し、下の例にならって大まかな変化をグラフに示してください。そして、急激な伸びを示した時期、伸びは急激ではないが競技の成功につながるような変化があった時期、スランプや低迷期などに○印をつけて、その原因と思われるもの(技術のコツがわかった、精神的に安定するようになった、など)を簡単にメモしてください。



資料2-3 インタビュー調査票



資料2-4 インタビュー調査票

7. 質問6でマーク(○)した、急激な伸びを示した時期、伸びは急激ではないが競技の成功につながるような変化があった時期において、上達の手がかりになったと思われるものがあれば、下記から選んで、その番号を図に書き入れてください(複数回答可)。

上達の手がかり

- | | | |
|----------------|---------------------------------|--------------|
| 1. 指導者の言葉 | 2. 自分の感覚 | 3. 自分の写真、ビデオ |
| 4. 一流選手の動き・プレー | 5. チームメイトや友人の動き・プレー | 6. 書籍や雑誌 |
| 7. 動物の動き | 8. その他 () | |
8. 競技生活を支える非利き腕の技や動き、最も印象に残っている非利き腕の技や動き、または最も得意な非利き腕の技や動きを1つ思い浮かべてください。その非利き腕の技や動きがどのようなものであるか、可能な限り詳しく記述ください。

9. その非利き腕の技や動きは、どのような感じやイメージで行っていますか。たとえば、たとえ、比喩、擬音語のような表現でも結構です。(例 ボールが当たる瞬間に手をパツと握る感じ、相手の下に潜るような感じ、スッ・スーツ・サツというイメージ、など)

10. その非利き腕の技や動きについて、どのようなコツ(ここを押さえるとうまくできるというツボ、意識するポイントや内容など)を持っていますか。

11. そのコツはいつ頃(何年頃あるいは何歳頃)つかめましたか。

12. そのコツをつかむキッカケはどのようなものでしたか。できるだけ具体的に記述ください。

(例 ○○選手に注目して試合を見ていたとき、コーチの○○○○という言葉など)

13. 上記の質問8～12で答えていただいた非利き腕の技や動きは、どのような状況や場面で有効ですか。

(例 相手ディフェンスがボールの動きに集中しているとき、など)

14. そのコツをつかんだころ、競技的にはどんなこと(体力面、技術面、精神面など)に悩んでいましたか。差し支えない範囲で具体的にお答えください。

15. そのコツをつかんだ時期の前後のことについてお聞きます。

(1) 技や動きの感じやイメージはどのように変わりましたか。

前

(

)

後

(

)

(2) 競技に対する意欲、考え方、取り組み方などはどのように変化しましたか。

前

(

)

後

(

)

16. 本調査は、ジュニア期における効果的な指導法を探るためのものです。あなたの経験から非利き腕のプレーを身につけるためにジュニア期に習得しておくべきであると思われる基本的な技や動きをいくつかあげてください。また、その基本的な動きや技をうまく行うためのコツはどのようなものとお考えでしょうか。ジュニア選手に教えるつもりで表現してください。

	基本的な動きや技	そのコツ
1		
2		
3		
4		
5		

17. ジュニア期において上記の動きや技以外に、身につけておくべきであると思われるものはどのようなものでしょうか。(例 学業、人間性、精神力など)

時間と労力を割いていただき、また、非常に貴重なご意見をいただき、誠にありがとうございました。

観察調査協力承諾書

1. 調査の概要

この調査は、ハンドボールにおける非利き腕のプレーに関する実践知の構造とその指導法に関する研究（研究代表者：吉本遼）の一貫として行われるものです。

2. 調査の目的

この調査は、指導者から競技者（協力者）へのハンドボールにおける非利き腕のプレーの促発指導、修正指導の結果、競技者（協力者）の技能がどのように変容していくかを観察し、今後のジュニア期の指導に役立てることが目的です。

3. 調査協力について

この調査への参加は協力者の自由意志によるものであり、調査への参加を随時、拒否・撤回できます。また、拒否・撤回によって協力者が不利な扱いを受けることはありません。

4. データの管理

収集したデータと個人情報の管理には十分な注意を払い、学術的な研究以外の目的には用いません。

5. 調査結果の公開

調査によって得られたデータは、研究発表や学術論文に使用されたり、ウェブ上で公開されたりすることがあります。調査結果を公開する場合は、協力者のプライバシーに十分配慮し、協力者が特定されないようにします。なお、調査結果の公開は、録画された指導映像と指導中の会話の記録に限ります。

6. 調査実施責任者

大阪体育大学大学院スポーツ研究科博士前期課程 曾根純也研究室 吉本遼
大阪府泉南郡熊取町朝代台 1-1
電話番号：090-5900-0522 e-mail：221m20@ouhs.ac.jp

私は、上記の内容を理解した上で、自らの意志にもとづいて、調査への協力およびデータの取り扱いについて承諾します。

承諾年月日： 年 月 日

研究協力者署名： _____

住所： _____ 電話番号： _____

代諾者署名： _____（研究協力者が未成年等の場合）研究協力者との続柄（ _____ ）

住所： _____ 電話番号： _____

説明者署名： _____

研究代表者署名： _____



写真1 A氏の得意としている非利き腕プレー



写真2 B氏の得意としている非利き腕プレー

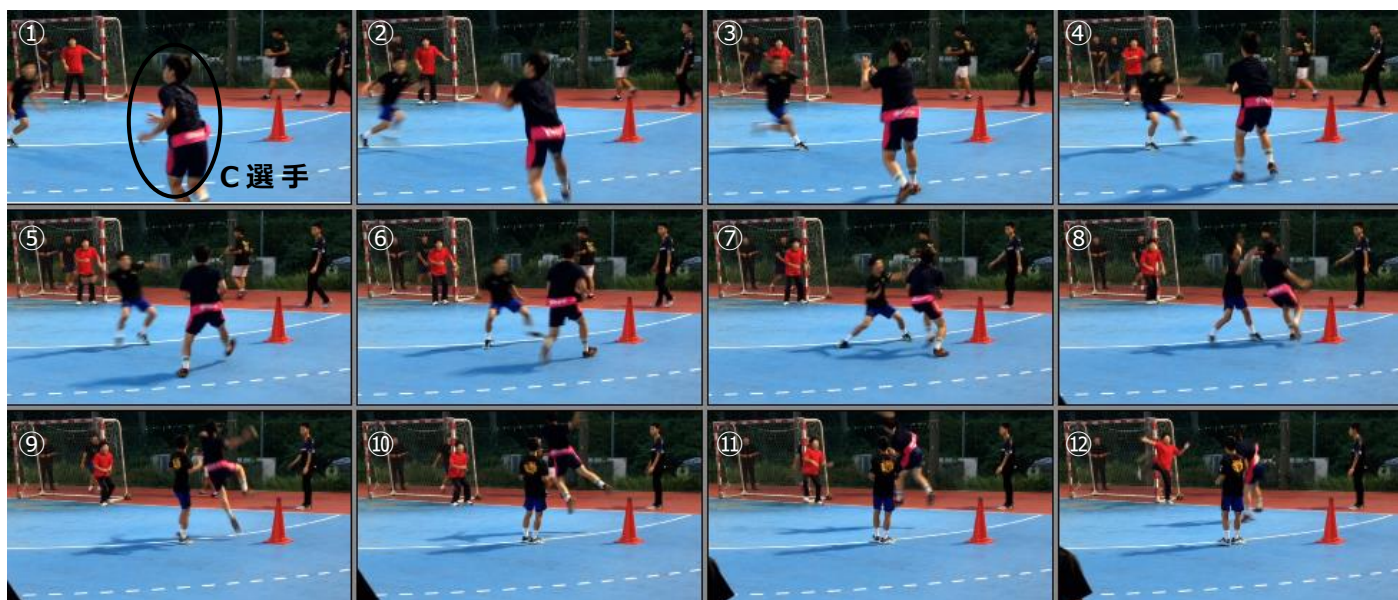


写真3 利き腕でのシュート



写真4 切り返して防御者に正面から接触される非利き腕プレー

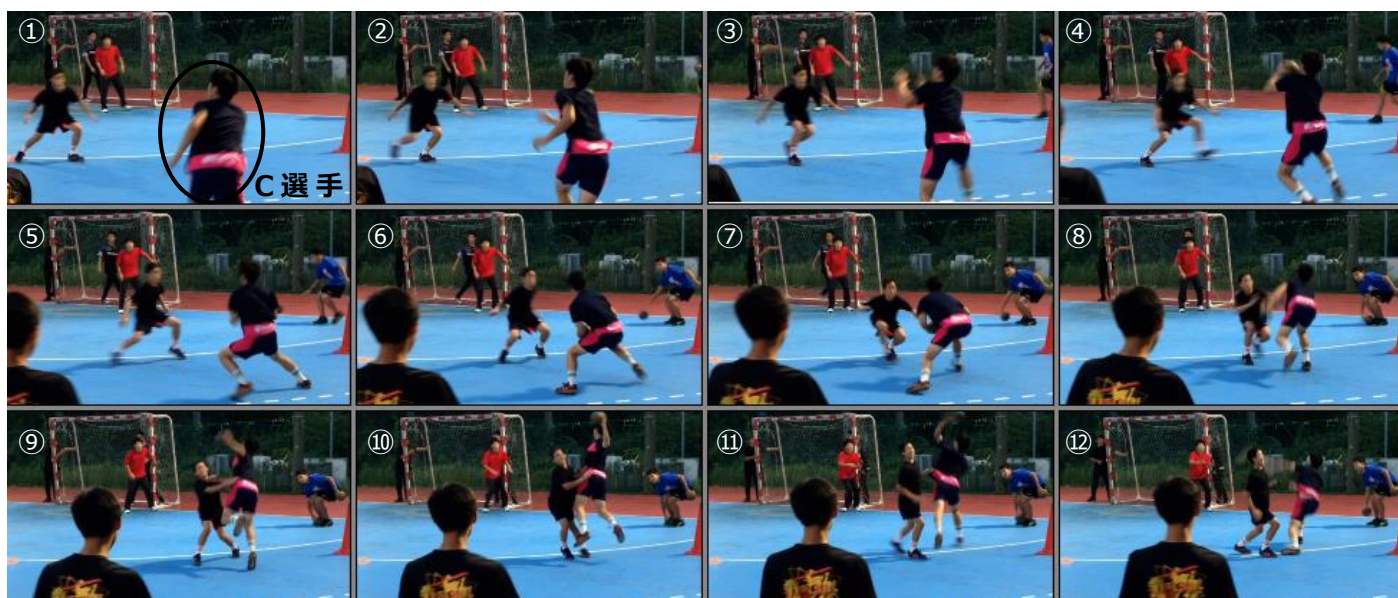


写真5 迷いながらの非利き腕プレー



写真6 突然成功した非利き腕プレー



写真7 防御者に接触されながらドリブルをした非利き腕プレー

(ドリブル有りの非利き腕プレー①)

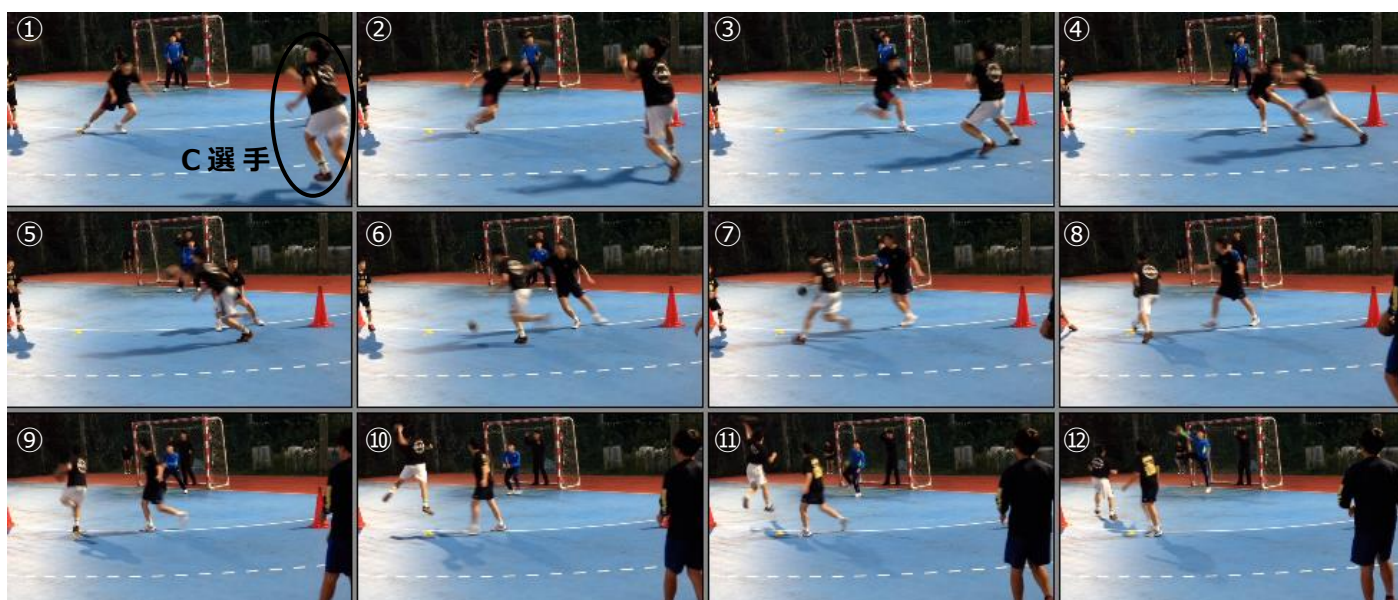


写真8 防御者に接触されていないにも関わらずドリブルをした非利き腕プレー

(ドリブル有りの非利き腕プレー②)

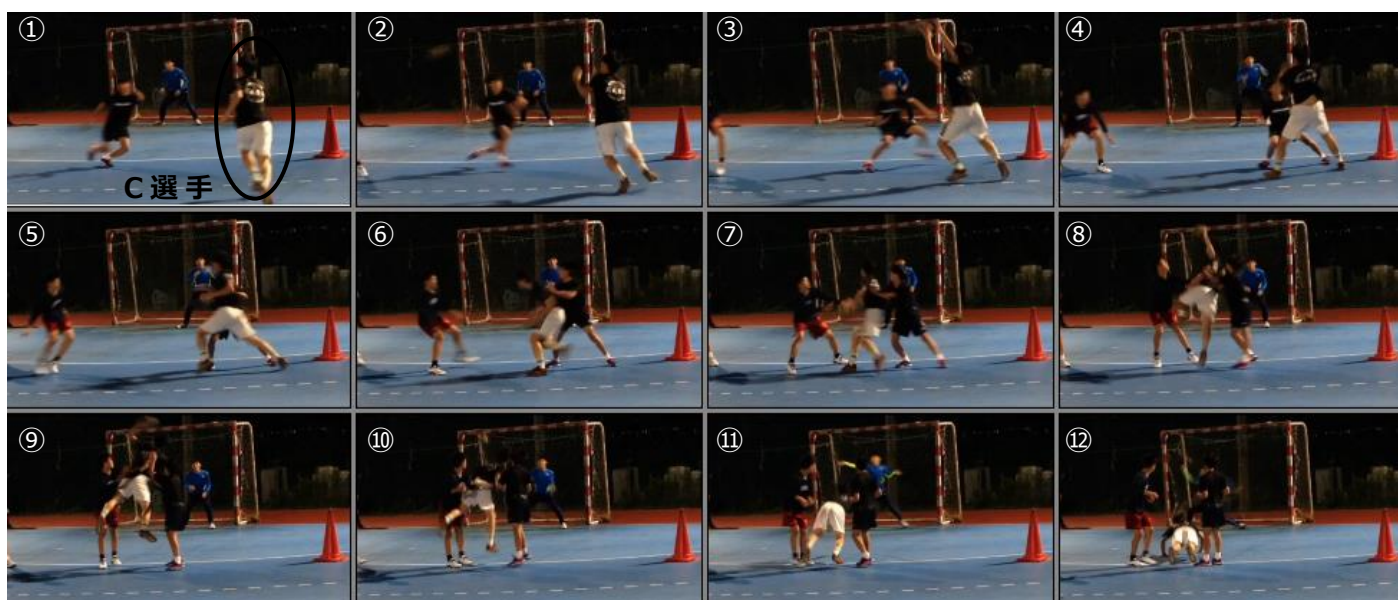


写真9 より試合に近い状況での非利き腕プレーの成功